
世界を救う者～ルミナシア編～

黄星テツヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を救う者～ルミナシア編～

【Zコード】

Z7646S

【作者名】

黄星テツヤ

【あらすじ】

ピカチュウが人間に転生してルミナシアのディセンダーとして生きていくお話です。

作者の始めての投稿作品なので温かい目で見ていてください。
投稿は話が浮かんだら頑張つてすぐに投稿したいと思います。

なんか違和感があるので題名変更！！

注意事項

他の漫画の要素や技入っているので注意してください。

他の漫画やアニメのキャラも出すつもりです。

ストーリーは本作通りではありません。

ハルローゲ（始まり）（前書き）

かなりの駄文です。けれど一生懸命書いたのでどうかゆっくり見て
いてください。

ヒューローク（始まり）

ここはカントー地方の地図に描いてもない小さな島。

そこには人は住んでおらずポケモンもピカチュウだけという不思議な島。

その島はとても平和で争いこともなく、人が誰一人来なくて平和な島でした。

けれどある日その平和な島にある日、小さな光が落ちてきました。

島のピカチュウたちはその光が何なんだつたのか調べに行きました。その光の落ちた場所にはピカチュウが住んでいたような形跡がありました。

けれどここに誰が住んでいたのかまったくわかりませんでした。

この島のピカチュウ達は忘れてしました。

ここに住んでいたピカチュウのことを最初から存在していなかったかのように・・・

Hピローグ（始まり）（後書き）

次の話もHピローグです。
神と出会います。

ヒュローゲ（神との遭遇）（前書き）

2話目完成。

このまま頑張りたい。

Hペローゲ（神との遭遇）

「ん？ いじるだ？」

何もない真つ白な世界そこにいたのは一人のピカチュウ。

「俺こんなところで寝てたつナ？」

このピカチュウは前回で行方不明になっていたピカチュウでした。

「ん～・・・ いじるだろ？ それとも夢かな？」

「残念だが夢ではないぞ。」

「えつ？」

ピカチュウの前に現れたのは髪がかなり長いじいさんだった。

「あなたは誰だ？」

「ワシは神様じや。」

「神様？ つづくとは俺は死んだのか？」

このじいさんは神様だった。

ピカチュウは神様＝死んだと思ったので聞いてみた。

「安心せい。おぬしは死んではおらんぞ。この時空にワープをせただけじゃ。」

とりあえず死んではないらしい。

「なるほどね。ならワープをせたってどうこう」とへ。

ただワープさせたといつといが氣になつたので聞いてみた。

「簡単じゃ、おぬしをもといた世界から今いのこの時空にワープさせたんじゃ。」

「なるほどね。なら話は簡単だ、俺を元の世界に戻してくれないか。」

「残念じゃがそれはできん。」

「なぜだ？ あんたは俺をワープさせれるんじゃないのか？」

「それは今、おぬしの力が必要な世界があるからじゃ。」

「俺の力？ 俺はその辺のピカチュウと力はあんまりかわんないぜ？ 「確かにそうじゃ・・・だがなおぬしには異能といつ力を全てあつかえる才能があるのじゃ。」

「どうやら神は元の世界に戻してくれないらしい。」

理由はピカチュウに救つてほしい世界があるかららしい。

ピカチュウは力がないので断ろうとした。

しかしピカチュウには異能といつ力が全て使えるらしい。

「異能つて？」

「異能とは現存するエネルギーなど「うん。よく理解した。」・・・

・そうか。」

異能の意味がわからなかつた・・・。

質問してみるとわけのわからない話になつたのですぐにカットした。

「けどその異能つて何かのリスクとかあるのか？」

「あるぞ・・・聞きたいか？」

「・・・簡単に頼む・・・。」

「あんまり使いすぎると小さくなつたり別の生き物になつたりする

ロストといつのがあるわ。」「

「・・・それだけ?」

「まだある、他のロストしかないとコードヒンドといつのがあるわ。」

「コードヒンド?」

なんとか理解しつつ聞いてみると異能は使っちゃるとロストとコードヒンドといつのがあるらしい。コードヒンドといつのがあるらしい。

コードヒンド・・・嫌な感じがある・・・

「コードヒンドとは簡単に言うと・・・・死だ・・・・」

「・・・・絶対に世界は救わん・・・・。今すぐ元の世界に返せ・・・・。」

「安心しろ。他のコードヒンドへりこなーのコジが押さえおつかい。」

「ロストは?」

「一つは無理じゃ・・・・。」

「ねー・・・。」「

どいつも神は一つを抑えるのは無理らしい。

ピカチュウはそれでも嫌なのか舌打ちしてたが・・・・。

「いいじやう・・・・・どうせ戻つてもおぬしは退屈なごじゃう?」

「・・・・否定はしない・・・・。」

「安心せー。あんまり使いたくなーなら日本刀へりこ「足つねえ」・

・・え?」

「日本刀と異能の力とコードヒンド抑えるだけじゃ足りねえよ。どうせならその世界の回復アイテム全種と最強になれるアイテムへりこよこせ。そういうないと絶対救わん。」

「お・鬼かおぬしは!-!-」

「鬼で結構・・・・じつすゐ?」

かなりの怖い顔でいろいろ注文し最後に齎す・・・主人公には見えない・・・。

「むむむむむ・・・・・」

ଶରୀରକାନ୍ଦିଲା

「5・・・4・・・3・・・2・・・「わかつたわかつた！！加えと
いてやるわ！—」・・・ちつ。」

結果は神が折れた。・・・。

「たゞしあぬしが絶対に世界数つともかづからぬ……」

「わかつたわかつた・・・あつ、どうせならその世界の全ての技

一
転送
！
！」

神はこれ以上は何も加えさせるかと転送した。

「ふう・・・昔よりかなり性格が違つたの・・・ちやんと戻してお
くかの・・・・・。」

ヒローゲ（神との遭遇）（後書き）

ヒローゲ2話目終了。

主人公がかなりの鬼畜になってしまった・・・・・ととりあえず神に任せます！！

次の話はキャラ説明で。

キャラクター情報（前書き）

今回はキャラクターの情報
・・・とりあえずがんばる。

キャラクター情報

名前：ピカチュウ・ライトニング
武器：日本刀（名：長刀・三日月）、エンシントブレード
アクセサリー：クルシスの輝石（無機生命体と睡眠と食事の能力は神の嫌がらせでなくなりました。）

髪の色：金髪の毛先は黒

目の色：両目青色

性別：男 年：16

身長：172 体重：51

（ピカチュウの姿のままじゃいけないと神は思つたので人間化させた。）

異能：全て可能だがまだあまり使えない「えにすぐ」にロストする（現在使える異能：電力・空・光）

ロスト：ピカチュウになる（しゃべる）ことが可能。

知能：なかなか賢い（流石にリタやリフィルにはかなわない。）

好きなもの：カノンノ、ロックス、アドリビトムの皆、リンク、ギター、昼寝、ティータイム、カノンノの手料理、ロックスの手料理、甘いもの

嫌いなもの：悪、ハロルドの薬、昼寝を邪魔するもの、ロスト時に来る肉球同窓会、ロスト時に来る可愛いものが好きなメンバー、×料理人の「」飯、アドリビトムの歯を傷つけるもの&悪口を言つもの、辛いもの

休日の過ごし方：昼寝・ギターを弾く（のちに登場するキャラに関するものです。）、読書、ロックスの手伝い、修行。

足りないのは発見しだいここに記入します。

キャラクター情報（後書き）

とつあえずできた・・・。
これでとつあえずまともになつたとゆつ
ついに本編に入ります。

第一話（玉ねぎ）（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
かなり嬉しくてその一回トーンショーンが高くなつていきました。
では次の話じうべ。

第1話（出発）

「ルバーブ連山（峠への渓谷）」

「さて、と。今回の仕事も、これで終わり！船に戻らなくちゃ。」

この少女はカノン・グラスバー。

ギルド『アドリビーム』の一員だ。

今は、仕事の帰りでルバーブ連山を下っていた。

「早く帰つてロックスを安心させてあげないと……あれは？」

遠くに不思議な光が見えて、そしてとても速いスピードで通り過ぎていった。

「何だろ？・・・」

カノンはあの光が気になってしまった。

「迎えまで、まだ時間がある・・・行つてみよう。」

カノンは不思議な光が向かった場所に向かった。

「ルバーブ連山（ルバーブ峠）」

「ん？・・・」「何？」

ピカチュウは田が覚めた。

周りを見てみると、どうやら山のようだ。

もっと奥を見てみると、高いう山があった。

どうやらこの山と繋がっているようなので同じ場所とは理解ができた。

「ん~、でも俺は何でここにいるんだ?」

ピカチュウに記憶は無かった。

神に記憶はほとんど消されていて、覚えているのは名前だけだった。

「どうあえず自分が何を持っているか見てみるかな・・・ポーチがあるしね。」

- 確認中 -

「あるのは、よくわからんグミみたいのが6種類が1個ずつと、よくわからんビンが6種類が一個ずつと、刀が一本・・・」

これだけだった。

あとは何も無く普通だった。

「・・・どうあえずこの赤いグミ食べよう・・・腹へったし・・・」

赤いグミを一個食べた。

そのとたん体とポーチに違和感が出た。

「あれ? 体が動かしやすい・・・?」

体の違和感は体が動かしやすくなつたからだつた。

「ポーチのは・・・あれ?」

そこにあつたのは赤いグミだつた。

「なるほど・・・あのグミやジンは飲み食いするとまた出でてくるのがやうやくポーチはアイテムを一個使つとまた出でてくる仕組みになつてゐるよつだつた。」

「腹減つたし、このグミ腹をこつぱー食つがーー。」

・・食事中・・

「ふう、お腹こつぱいだ。こじてまこのポーチはおもしろくな。」

ピカチュウはポーチをとてもおもしろこので戻に入った。

「わい、とつあえず山を下りてみるか・・・ん?」

足音が聞こえてきた。

「何だるひへ。」

聞こえてくる方向は自分の真正面。
だんだんこぢりあがいてきてくるよつだ。

「やつとついた・・・あれ？」

女の子は周りを見ていた。
そしてこちらに気がついた。
なぜか少し頬を赤めながら。

「あ・あの、すいません。」「ん? どうした?」

女の子はこちらに話しかけてきた。

「いじらへんで不思議な感じがする光を見ませんでしたか?」「いや、見てないな。」

女の子はどうやら不思議な感じがする光といつのをさがしているらしい。
不思議な光・・・何かひつかかる・・・・・。

「そうですか・・・そういうえば名前をまだ言つてませんでしたね。
私はカノンノ・グラスバレーです。」「俺はピカチュウ・ライトニング、とこうで不思議な感じがする光
つてこちら辺に落ちたの?」「はい・・・どうに行つたんでしょうか・・・」「もう一つ、・・・ここには他に誰かいたか?」「私が来たときはいませんでしたよ?」「・・・もしかするとだが、俺がその不思議な光かもしれない・・・・・。」「えつ! ・・・どうしてですか?」

この少女は名前はカノンノ・グラスバレーだった。

とりあえず自己紹介されたので自分もしといて、気になつた所を聞いてみた。

そしたらこの場所に落ちたらしい。

・・・カノンノが見たときはこの場所には誰もいなかつた・・・この場所に不思議な光が落ちてきた・・・自分が目を覚めるといこにいた・・・、周りを見た時は、自分以外誰もいなかつた・・・、そして・・・自分には記憶が無かつた・・・。

この条件なら自分がその不思議な光の可能性が高い。
その仮説を言つてみるとやはり驚かれた。

とりあえず説明しておくことにした。

- 説明中 -

「確かにその可能性が高いですね・・・。」

「ああ、・・・とりあえず俺はこの山を下りるよ。」

「えつ！-!行くところがあるんですか？」

「いや・・・、とりあえず街にどつにかかるだらけ・・・。」

カノンノも信じてくれたようだ。

とりあえず自分は目的通り山に下りることにした。

そしたらカノンノに驚かれて、行く所があるのか聞かれた。
ピカチュウには残念ながら行くところが無かつたが、街に行けばどうにかなる気がするのでとりあえず行ってみることにした。

「危険ですよ！記憶も無いのに一人で行動するなんてー！」には強い魔物だつているんですよ！-!」

「大丈夫だよ。俺にはこの刀がある。」

「それでも駄目です！-!・・・、そつだ！なら私たちの船に来ませんか？」

「・・・けど邪魔にならないか？」

「大丈夫です。その船はギルドをしていますから。」
「なるほど……でも俺なんかが入れるのか？」

カノンノに必死で止められた……。

そんなに弱そうに見えるのかのとピカチュウが思っているとカノンノに船に来ないかと言られた。

けど自分がそんな所に行つたら邪魔になりそうと思つたので聞いてみたら大丈夫と言われた。

その船はギルドというものをしてゐらしい。

けれどそんなのに記憶の無いよそ者が入れるのか気になった。

「大丈夫ですよ。今、そのギルドは人手不足ですから入れますよ。ピカチュウさんとでも強そうだし。」

（それなら何で止めたんよ……まあ、街でバイトするよりかいにかな……。）

「……わかった。そのギルドに入るから、カノンノその船に案内してくれ。」

「わかりました。じゃ、ついて来てください。」

ギルドに入るそう言つとカノンノはついて来るよつて言つて来た道に戻つて歩き出した。

ピカチュウはその後ろ姿を追いかけながらこつ思つていた。

（なぜこの子はこんなに俺を引き止めるのだろうか……とりあえずついて行くか……。）

対するカノンノは

（よかつた、ついて来てくれて……けどピカチュウさん見たら何で頬が熱くなるんだろう……帰つたらロッカスに聞こつ……。
。。）

第1話（出雲）（後書き）

とうあえずこれで1話は終わりです。
正直終わり方がまったくわからない・・・

次は話はパソコンが無いところに行くので更新が遅れます。
帰つて来た次に田に書く予定なのでよろしくお願いします。

次はついにピカチュウが異能を使います。

第2話（戦）（前書き）

いきなりですがいろいろと設定変更します。
まずペカチュウの頭脳はかなり上昇していふことと
ロストの時の記憶と性格は無くすることと
性格を優しくて勇敢にしました。

いろいろ設定変更してすいません・・・それでは本編びりついでーーー。

第2話（戦い）

「あれ？ピカチュウさんその胸元にある赤い石はなんですか？」

「赤い石？・・・本当に・・なんだろうこれ？」

カノンノはピカチュウの胸元にある『クルシスの輝石』に気がついた。けれどピカチュウは今まで気づかずに能力もわかつていなかつた。

「体に異変無いですよね・・・？」

「大丈夫だよ。逆に体が動かしやすいし。」

「ならよかつた・・・あつ、橋が見えましたよ。」

カノンノはピカチュウに何も悪いところが無いか聞いてみたがピカチュウに何も無いうえに逆に調子が良いと言われたので安心した。ピカチュウとカノンノが『クルシスの輝石』の話をしていると橋が見えてきた。

「橋が上がってるな・・・どうする？」

「大丈夫です。ほらそこにあるボタンを押してください。」

橋についたが、橋が上がっているのでカノンノにどうするか聞いてみた。

そしたらカノンノはピカチュウの左側にあるボタンを押してと言われた。

「これが？・・・ボチッと。」

ピカチュウはボタンを押した。

そしたら橋がゆっくりと下りてきた。

「・・・おもしろい。」

「えつ？何か言いましたか？」

「はつ！な・なんでもないよ。」

「あやしー・。」

「あつ、ほら橋が下りたから早くさきに進む。」

「・・・わかりました。」

ピカチュウは不覚にもこの橋がおもしろくてつい口に出してしまった。

しかもその言葉がカノンノにも内容は聞かれなかつたが少し聞こえたようで慌ててしまつた。

何でもないと言つたが怪しまれてこらままなのでとりあえず、さきに行こうと促した。

そしたらカノンノはしづしづ賛成してくれた。

（次は言葉に出さないよついし・・・何だ・・・・・・）の『配』・・・。

（）

ピカチュウは次は声に出さないよついお誓おつとすると近くに何かの『配』がした。

（）の感じは・・・あの辺の『配』からか・・・。）

『どうしたの？早く行けよ。』

「待て。」

カノンノが気づかずに行こうとしたので止めた。

「えつ？どうしたの？」

スツ

近くにある石を拾つた。

スタスタ

岩陰の横についた。

グツ

握り締めた

ブン！

岩陰に向かつて石を投げた。

ガン！

何かにあたつた。

ばた

何かが倒れた。

「えつ！？何々！？」

カノンノが慌てた。

「「」の岩陰に何かの生き物がいた……これだ。」

それは青いオタマジャクシのよつな生き物だった。

「あ、それはオタオタだよ。」

「オタオタ？」

「うん。魔物の一種でとても弱い部類なんだ。」

「ふうん……とりあえず氣絶してるし、さきに進むか！」

「そうだね……あつ！」

「どうした?」

「せつまは止めてくれてありがと。」

カノンノに急にお礼を言われた。

「どうしたんだ急に?」

「だつてあのまま進んでたら、私ケガしていたかもしれないじゃ。止めてくれたピカチュウさんにお礼を言いたくて。」

「なるほどな……じゃ、かわりに俺の頼みごと聞いてくれないか?」

「?」

「えつ！？頼みごと！？」

「ああ、かなり簡単だ……俺にさん付けやめてくれないか?」

「えつ？さん付け嫌いなんですか？」

「ああ……さん付けされると体が痒くて痒くて……。」

「はは……わかりました。さんは付けないよつたしますね。」

「ありがとう。それじゃ、次こそ行こう！」

「はい！」

- - 移動中 - -

橋の前

「ボチツヒ」

橋がゆくくり下りてきた。

卷之三

あ・秋はまだかなうにて（あふね）、飽きたなうにて言ひそうた二

• • • • •
• • • • •
• • • • •

3

- - 移動中 - -

ルバープ連山登頂口

「えりと、ここからの道は・・・いつものまま道をまっすぐ行くんだけれど、今回はずいのわき道を行く。そこで、迎えの船が来てくれるんだ。」

「えっ！…ど・ど…？」
「う…か…それ…行…か…」
「う…か…行…か…」

もつ船に着くといつ所でもた何かの氣配がした。
氣配がする所を見てみると10の鳥がじゅうに向かって飛んできて
いる。

カノンノは気づいていないらしくて急いで声をかけた。

カノンノは何処かわからないようで慌てていたが場所を言つとすぐに武器を構えた。

「あれは、ガルーダ！！オタオタよりかなり強いから氣をつけて！」
「了解！」

ガルーダ一匹がピカチュウに向かつて突つ込んできた。

「あまい！！」

ピカチュウは軽々とよけた。

（ん？何か頭に入つてくる？・・・剣の技か？三つもある・・・）

ガルーダが旋回してまたこちらに突つ込んできた。

（ちょうどいい、一つ試してやる・・・）

「ぐりえ！『瞬迅剣』」

ピカチュウは剣を抜くと突きをくりだした。

ギヤア・・・

そのままガルーダの胸を突き破り一撃で絶命させた。

（ん？後ろから気配が・・・。）

ピカチュウの後ろからガルーダが突つ込んできた。

(避けてから一いつ回をあててやる！…)

ギヤアアアアアアアアア

仲間の仇だといわんばかりに低空飛行で突っ込んだ。

「あまいぜ！」

ピカチュウはジャンプして避けた。

「ぐりえ！…」一つ目の技『魔神剣』！…」

ピカチュウは剣から衝撃波を出した。

その衝撃波はガルーダに突っ込んでいきガルーダに命中した。

「とどめだ！…」

ピカチュウはガルーダをそのまま切り裂いた。

ギヤア…

(次は…・・・3匹でかたまつてやるな、俺を警戒してやるのか？)

ガルーダ達はピカチュウに警戒したのか、かたまつて戦おうといふ。

(おもしろい…・・・最後の技で決めてやる！…)

ピカチュウは走り出した。

ガルーダも反応して迎えようとしたが・・・
ピカチュウはさらに加速をしてガルーダ達の目の前に来た。

ギヤアアアアア？

「終わりだ・・・『抜刀・桜』」

1番目の前のガルーダを右斜め上に抜刀で斬り
流れるように2番目のガルーダを左斜め前に斬り
足に力を加えて飛び出し3番目のガルーダを横に一閃した。

ピカチュウは剣を鞘に戻した。

その瞬間ガルーダ達から大量の血が出てきて絶命した。

「終わつたか・・・後は5匹だな。」

ピカチュウはカノンノ方に向いた。

カノンノは驚いていた。

ピカチュウがすでに5匹のガルーダを倒していることに。

（私はまだ1匹しか倒していないのに・・・）

今、カノンノに対峙ガルーダは3匹。

（あれ？あと1匹は？）

「カノンノ！！後ろだ！！」

「えつ！？」

気がつくとガルーダはカノンノ後ろにいた。

後ろにいたガルーダはすでにカノンノに突っ込んできていた。

(ま・間に合わない・・・うつ・・・)

「カノンノ！」

カノンノはガルーダの攻撃をうけて武器を落としたうえに、威力と体が軽いせいか武器に離れたところに飛ばされてしまった。さらにあたり所も悪かつたせいか体が動かなかつた。

(どうしよう・・・このままじゃ・・・・・)

カノンノに攻撃をうえたガルーダがまたカノンノに攻撃をしようと突っ込んできた。
ピカチュウが全力でこっちに来てくれようとしてくれているが間に合ひそうにない。

(私死んじゃうのかな・・・)

カノンノはほとんど諦めて、目をつぶつていた。
けどピカチュウは諦めていなかつた

(くそおー！速く、速く動けよ俺の脚ー！カノンノを守るんだー！)

ピカチュウは最初は魔神剣を放とうとしたが間に合わないので止めて、カノンノの所に走つた。

その時だつた、ピカチュウは異常に目覚めたのは。

(間に合えー！・・・ん？この頭に入つてくる映像は？)

その映像は王冠を被つた少年と体が透けている黒い髪の青年と白い

髪の青年がいて、白い髪の青年が、体が透けている黒い髪の青年に『光速』で後ろにつく映像だった。

(もしかして……この力を使えるのか……?)

ガルーダがカノンノに攻撃があたるのはもう30回ぐらいだった。

(考えるのは後だ!! ぶつけ本番だ!!)

その時ピカチュウの体が光り輝いた。

そしてピカチュウはカノンノを両腕で掴んでいた。

(ま・間に合つた・・・とりあえずもつ一度使つ……)

またピカチュウの体が光り輝いた。

そしてピカチュウはガルーダ達と少し離れた所にいた。

「大丈夫か? カノンノ?」
「あ・あれ? 私・・・生きてる?」
「ああ、よくわからないけど、俺の新しい力でな。」
「そりなんだ! ありがとうピカチュウ。」
「どういてしま・・・ん?」
「どうしたの?」

また頭に一つの映像が流れてきた。
一つ目は、顔に瘢痕がついた黒い髪の青年の周りに風が舞っている映像。

二つ目は、黒い髪をかなり伸ばしてボニー・テイルにしている青年と、さつき透けていた青年だった。

けれどさつき透けていた青年とは、左手から青い炎を出していてか

なりの気迫を出していた。

長い髪をポニー・テイルにしている青年が、透けていた青年の周りに

電気をだした。

『空中放電』^{フランシュオーバー}と言つて。

「『空中放電』^{フランシュオーバー}・・・・・使い方も出てきた・・・。」

「ピカチュウ？ピカチュウ！！」

「ん？どうした？」

「どうしたじゃないよ・・・急に動かなくなるから心配したんだよ・・・。」

「そうか、すまない。」

「大丈夫だよ。けどどうする？私は動けないし、ピカチュウは私を抱えてて剣を構えられないし、ガルーダ達に囲まれちゃったし・・・。」

。

確かにピカチュウとカノンノはかなりピンチだつた。

カノンノはさつきの攻撃で体が動かせないし、ピカチュウはそんなカノンノを抱きかかえてるので攻撃ができなかつた。

さらにピカチュウが剣を持てないことに気がついたのかガルーダ達はピカチュウ達を囲んでいた。

「じゃなつたら・・・ピカチュウ、私を餌にしてあいつら倒すか逃げで。」

「はあ！？そんなことしたらお前がただじゃすまないぞ！！」

「こんなことになつたのは私のせいだもん・・・だから私が餌になるしかないよ・・・。」

「・・・なら一人が助かる方法があればお前も納得するか？」

「えつ！？あるの方法？」

「ああ・・・時間がかかるがな。」

「・・・わかつた。ピカチュウに全部任せる。」

「ああ、任しとけ！！」

そう言つてピカチュウは1匹のガルーダに向かつて走り出した。
ガルーダは虚を衝かれたのか反応できなかつた。
そしてピカチュウはそのガルーダの後ろについた。

「吹き飛べ！！」

そういうとピカチュウの周りに風が舞つた。
そしてその風がガルーダを吹き飛ばした。
ガルーダ達はまたピカチュウを警戒したのか固まり始めた。

（狙いどおりだ。次は電気を・・・）

ピカチュウの周りから電気が発生し始めた。

「えつ！？えつ！？何これ？？」

「安心しろ・・・カノンノにはあてないから・・・。」

とりあえずカノンノにそれだけ言つておいた。

ガルーダは何かをしてくるのか予想できないせいかこつちに襲つてこない。

（好都合だ・・・これだけあれば十分だ！！行け！！）

電気が素早くガルーダを囲んだ。

「終わりだ・・・『空中放電！』」
フランクショオーバー

辺りに閃光に包まれた。

・十分後・

「ん? ここは?」

ピカチュウは田を覚ました。

「俺は確か・・・そうだ!! カノンノとガルーダは?」

カノンノは自分の胸の所で氣絶していた。

斬り殺したガルーダ以外は姿も形も無かつた。

焦げた地面の後以外・・・

「どうやら倒せたらしいが・・・この力はかなり強すぎるな。」

ピカチュウはこの電気の力を恐れていた。

「あんまり電気は使わないことにしよう・・・。」

『お~い!!、カノンノ!! どこにいるんだ!!』

「ん? カノンノ? • • 船の仲間か?」

遠くからカノンノを呼ぶ声が聞こえてきた。

「とりあえずそこに向かつか・・・。行くところないしな。」

ピカチュウはカノンノをおんぶして声の聞こえるところに向かつた。

第2話（戦い）（後書き）

かなり長かった・・・

疲れがたまたた気がする・・・

これで2話は終わりにします。

次は入隊試験します。

第3話（入隊試験 前編）（前書き）

中々話が浮かばなかつた・・・
しかもまた長くなりそつたので前半・後半に分けるしかなかつた

キャラクター説明更新

好きなもの、嫌いなもの、休日の過ごし方を更新しました。
ちなみに投稿、ギリギリ前にも更新しているので、確認お願ひします。
では、本編どうぞ！

「カノンノ~~~~~!!~どこにいるんだ~~~~~!!~」

この赤い髪で腹を出している少年はリッド・ハーシュ
今は船が到着したらいつもいるカノンノがいないため探索しにきた
のだ。

「どこに行つたんだろう・・・、確かに依頼はルバーブ峠の方だよね？」

この緑色の髪の少女はファラ・エルステッド
彼女も同じくカノンノを探している。

「私がアンジュから聞いたにはそれであつてるはずだ・・・。」

この薫色の髪の大人はクラトス・アウリオン
彼もまた二人と同じだ。

「カノンノの奴何があつたのか？いつもならすぐにいるはずなんだ
けどな～？」

あつたのは聞いてるけど・・・・。」

「もしかしたらその閃光にやられたかもしけん……。」

「けどその閃光が起きたのは高原の方だろ？カノンノは任務で向か
つてないはずだ。」

「そうだよー！ クラースも変な」と言わないでよー。」
「すまん・・・。」

彼らはカノンノのことでもめていたようだ。

そこに

「お～～い！…そこに入たち～～！…」

と言ひながら二つちに近づいてきた。

「ん？ あんたは？」

「俺はピカチュウ・ライトニング！ あんたははカノンノの知り合いかい？」

「つつ！？」

「？」

「カノンノを知ってるの！？」

「あ・ああ、後ろで今おんぶしてるよ。… 気絶してるけど。」

リッドは誰かわからないので名前を聞いてみた。

声をかけた人はピカチュウだった。

クラトスは名前を聞くと何か驚いたようだった。

そんなクラトスの反応にピカチュウは気がついた。

どうして驚いたか聞こうとしたがその前にファラに質問されたので答えた。

「一つ聞きたいんだが、何でカノンノ氣絶してんだ？」

「…・・・ちょっと助けるところで失敗して、かなり強い閃光で…・・・

。

「あの閃光はあなたの仕業なの！？」

「ああ、一応な・・・。」

「立ち話もなんだ・・・・船で話せばいいではないか・・・。」

クラトスにそう言われた。

「そうだね。カノンノも無事だし、とりあえず船に戻るつ。」

「そうだな、早く帰って飯にしようぜ。」

「わかつた。えへへと・・・?」

「あーーごめん!名前言い忘れてたね、私はファラ・エルステッドだよ。」

「俺はリッド・ハーシェル。」

「クラトス・アウリオンだ・・・。」

「了解!じゃ、道案内お願ひします。」

- - 移動中 - -

~~バンエルティア号~~

「なるほど・・・記憶が無いうえに行く所が無いのね・・・。」

今まであつたことをアンジュとクラトスとリッドとファラに話していた。

ちなみにカノンノはアーネといつ少女に運ばれていった。

「わかりました。あなたをギルド『アドリビーム』の一員として迎えるね。」

「いいのか?俺みたいなわけのわからない奴なんて入れて?」

「大丈夫よ。カノンノも認めているし、あなたもかなりの実力者だしね。」

「・・・そうですか。」

「けど一応、入隊試験は受けもらひね。」

「入隊試験? そんなのあるのか?」

入隊試験・・・筆記試験で歴史や地理を書けなんて言われたら一発で落ちそうだなと考えていると

「大丈夫よ。筆記試験じゃないから。ただのモンスター討伐よ。」
「（心読まれた！？）……わかつてたよ……。」

かるくピカチュウは焦っていた。

「もう？ とりあえず試験の依頼を考えておくから、その間に船員に挨拶しておいてね。」

「わかつた。」

「待て、アンジュ。」

「どうしたのクラース？」

いきなりクラースがこれからどの依頼をやらせようか考えているアンジュと

皆に挨拶に行こうとしたピカチュウを止めた。

「IJの船内見取り図を渡したか・・・・？」

「「あつ・・・・」」

どちらも忘れていたようだ・・・

「「あんね、はここれが船内見取り図ね。」

ピカチュウは船内見取り図をもらつた。

「IJの通りに挨拶すればいいんだな？」

「ううよ。それじゃ、挨拶に行つてらつしゃい。」

「アンジュ話がある・・・。」

クラースはそつとアンジュと話し始めた。

「とりあえず俺達は食堂にこいつぜ、ファラ。」

「そうだね。」

リッドとファラは食堂に向かった。

「・・・とりあえず行くか・・・。」

「挨拶中・・・」

「～医務室～」

「こんにちは～って・・・さつきの・・・」

「あ・こんにちは、私はアニー・バース。ヘーゼル村の出身です。俺はピカチュウ・ライトニングです。あの～カノンノの状態はどうでしたか？」

「大丈夫ですよ。体にぜんぜん問題ありませんでした。」

「そつか、よかつた・・・。」

「もう少ししたら目を覚ますと思いますが待ちますか？」

「ゴメン、アンジューさんに入隊試験の依頼が出されるから待てないんだ・・・。」

「わかりました。なら終わつたらでも顔を出してあげてください。」

「わかりました。では、失礼しました。」

医務室を後にした。

「移動中+いろいろカット・・・」

「後は食堂だけか・・・ん？」

ピカチュウは後、船員4人を抜かして挨拶していた。

「後は、クレア・ベネット、ロックスプリングス、ルカ・ミルダ、エミル・キャスター、エカ……クレアって人ととロックスつて人は多分食堂だらうけど……ルカつて人ととエミルつて人は仕事でいないうからどうじょうかな……。」

エミル・キャスター、エカ、ルカ・ミルダは一人で仕事に出かけていていなかつた。

「一応、同室のイリアとマルタに特徴が聞けたが……役に立つな……。」

特徴はルカは弱虫や、エミルは怖がりだがかつていい王子様とか役にたたなそうなことを言われただけだ……。ピカチュウが悩みながら食堂とクレス達と空き部屋がある通路に入ろうとしてすると

ドン！！

誰かが背中にぶつかってきた。

「い、「ああ……」・「じ、じ、じめんなさい……」いやだい、」
「お・おわびに焼きそばパン買って来ます……」「ちょっと待つて！」

白い髪の少年と黄色い髪の少年が頼んでもいない焼きそばパンを買に行こうとしたのでとりあえず肩を掴んで行かせないようにしてた。

「「ああ……一個じゃ足りませんよね……なら有り金全「聞けー

-----「ひい！…」

「とりあえず黙らせた。

「とりあえず、俺は怒っていないから・・・焼きそばパンは買つてこなくていいよ。」

「「はい・・・。」」

「後、聞きたいんだが・・・君はルカ・ミルダとミル・キャスター二エか？」

「「はい・・・。」」

イリアとマルタの説明通りだ・・・

「俺はピカチュウ・ライトニング。新しく君たちがいるギルドに入つた者だ。・・・試験はまだ合格していないけど。」

「新しく・・・? 何だか急ですね?」

「そういえばそうだね・・・」

「?いつも知らせれたりしてるのか?」

「はい、アンジューさんから皆に知らせて、部屋で待機して待つているんです。」

「来たときには誰かいないと困りますしね。」

「・・・そうか・・・確かに俺は急だもんな・・・。」

(なるほど、だから全員が船にいないわけだ・・・・・)

「とりあえず、これからよろしくな。」

「「はい、よろしくお願ひします。ピカチュウさん。」」

「・・・俺のことはピカチュウと呼んでくれないか?」

「えつ！-!け・けど・・・。」

「・・・迷惑になりませんか?」

「俺は君を仕事仲間であり、友達としてみたい・・・駄目かな?」

「「。。。わかりました。ピカチュウ。」」

「よし！…これからよろしくなルカ、エミル！」

握手をするため両腕を出した。

「かうじさんよろしくお願ひします。ピカチュウ！」

ルカとエミルもそれに応え、エミルが右手をルカが左手を出し握手した。

「それじゃ、俺は食堂に挨拶あるからまたな。」

「ハリハリハリハリ」

「ああ、あいつがいい、
お前も。」

エミルとルカとわかれて食堂に向かつた。

- - - 移動中 - - -

「ねじやましまーす。」

「あつ、君がリッドとファラが言ってた新しい、ギルドの方ですね。

「どうも、初めまして。ロックスプリン

とお及び下さい。」

「俺はピカチュウ・ライトニング。新しく君たちがいるギルドに入つた者だ。・・・試験はまだ合格してないけど。」

とりあえず自己紹介。

「「」——寧に、どうも。僕はギルドの皆さんのお世話をわざと頂いている者です。」

「ロックスさんは、家事やギルドの経理なども任せている、この船の、いわば『コンシユルジユ』なんですよ。」

「この船で皆様が安心してくつろげるよう、日々ホスピタリティの向上に努めています。何か御用の時は申し付けて下さいね。」

「わかりました。」

「それにしても、また船の中がいつも賑やかになりますね。」

「ええ、食事の時は特に！楽しくなると思いますよ。」

「今日は、ピカチュウ様が新しく入った事ですし。腕にヨリをかけて、『馳走にしましょうか。』

「そうですね。それじゃあ、今日は忙しくなりそうですね。」

「俺のために・・・ありがとうございます！」

「いえいえ、いいんですよ。それじゃ、ピカチュウ様これからもお願いします。」

「「」——あよびくお願いします。」

今日は『馳走らし』。

ロックスとクレア優しい人だな、と思いつつ部屋を出た。

---移動中---

「アンジューさん、皆に挨拶終わりました。」

「あら、ちょうどいいわ、ちょうど試験を決めたところなの。」「試験内容は何ですか？」

「コンフェイト大森林で、ウルフ10匹の討伐よ。同行者はクラフトス、モンスターの居場所と姿は依頼書に書いてあるわ。」

「わかりました。（ちょうどいいや、出合った時に何で驚いたか聞こづ・・・）」「」

今回のクエストは、クラトスが同行者らしい。ピカチュウはあつた時のことについてでに聞こうと決心した。

後編に続く・・・

第3話（入隊試験 前編）（後書き）

前半終了！

作者はエミルとクラトスとコーリとガイとロイドとルークとカノン
ノ（全員）好きです。

だから好きなやつはかなり目立たせよつと思ひます。

名前だけや、名前ですら出てないキャラたちはすいません！！絶対
出しますから！！

てかエミルがルカと同じ性格になつた・・・出し方がわからなかつ
たんだよ！！

後半はバトルとピカチュウの過去話メインだから頑張らないと！
さらに他の世界のキャラを出そうと思います。
ヒントは水の力を持つたギターを弾く者です。

第4話（入隊試験 後編）（前書き）

ピカ「皆さんあひゅうつもーーく、作者が早速やらかしました～。」
クラ「感想ページで皆が作者の返事を見れるようにできるのに、それを忘れてメールで送つてしまつたのだ・・・馬鹿か？」
すいません・・・

ピカ「はあ、とりあえず答えを言つとくぞ。カツタ様の提案されたエドとアルは登場することになりました。」

クラ「しかし、ハロルドがまだ出てきていないので、もう少し待つてくれ。」

ピカ「けど、頑張つてすぐに出すので安心してくれよ。」

クラ「いろいろ他の出し方があるが・・・死んだやつの出し方のしか今は無いからな・・・」

ピカ「作者は鋼の錬金術師はわからないので、死んでないやつの出し方するのでハロルドが必要なんだ。」

クラ「だからこの出し方しかないんだ・・・すまない。」

ピカ「ちなみになぜ俺をテイルズに転生させたかは、作者の好きなキャラクター + これしか思いつかなかつたからだつて。」

皆さん本当にすみませんでした。
では、どうぞ！！

第4話（入隊試験 後編）

「ここがコンフェイト大森林か。」

ピカとクラトスは今、入隊試験の魔物がいるコンフェイト大森林に来ていた。

「気をつける、どこから魔物が出るかわからんぞ・・・」

「わかったよ。てか、あんたに聞きたいことがあるんだ。」

「・・・何だ？」

「あんたはなぜ、俺のことを最初に見た時に驚いていた？」

クラトスは最初にピカを見た時にかなり驚いていた。ピカは、そのことに気づき聞いたがっていた。

「・・・そのことについては、歩きながら話そう。」

「・・・わかった。」

とりあえず歩きながら会話。

「・・・お前は自分がどんなやつかわかるか？」

「・・・わかんねえよ。気づいたらルバーブ連山で寝てたわけだからな。」

「そうか・・・ならお前の少しだけなら話せる。」

「全部は？」

「私も、お前の全てを知っているわけでは無い。」

「そうか・・・知っていることは？」

「・・・すまないが全ては話せない。」

「・・・わかった。」

クラトスは知つてゐること全てを話してくれないよつだ。

「まず、お前はこの世界の者じゃ無い……。」

「……どうしたことだ？」

「お前は他の世界の者なのだ。そしてお前はいろいろな世界を旅し、救つていたのだ……これが証拠だ。」

クラトスはそういつて、剣を出してピカに渡した。

ちなみにウインドバックで出したのでどこから出したは無しです。

「どうだ……何か感じないか？」

「……何か懐かしくて……悲しい感じがする。」

「……それが証拠だ。お前はその剣を使って世界を旅していたのだ。」

「……思い出せない……どうしてだ？」

「……お前はこの世界に転生の途中で事故が起きて、別の世界に飛ばされて、記憶が無くなつたらしい。」

「……マジかよ。」

どうやらピカはこの世界に来る途中で事故が起きて、記憶を無くしてへべりながらのこの世界にいるらしい。記憶を無くしてへべりながらのこの世界にいるらしい。

「……記憶は治るのか？」

「きつかけがあればもとに戻るらしい。」

「きつかけ? 例えばどんなことだ?」

「……その旅していた世界の者に会つといつたらしく。」

他の世界の人会つ……無理なことを言い始めた。

「……この剣で別の世界にとげるのか？」

「……残念ながら無理だ。その力はもともと神がしていたからな。」

「神？誰だそいつは？」

「……お前を転生させたものだ。余りには世界を救わなければならぬ。」

「マジかよ……ならどうすればいいんだ？」

「……お前の胸元にあるクルシスの輝石だ。」

「？」これのことか？」「

クラトスに胸元にあるクルシスの輝石が必要と言われた。そつ言つてピカはクルシスの輝石を触つた。

「……何も起こらないが？」

「……触るわけじゃない、そのクルシスの輝石の記憶だ。」「記憶？」

「ああ、そのクルシスの輝石は特別製で一度別れた仲が良い者と、もう一度引き合わせる力があるのだ。」

「……なるほど。」

ピカのクルシスの輝石は特別らしい。

その力でピカの他の世界の仲間と会えるらしい

「今、言えるのはこれだけだ。……後はお前の記憶の戻つた量によつてだ。」

「わかった。てかなんでクラトスはそんなこと知つているんだ？」

グルルルルルルル

「ん？……ターゲットのウルフようだな。」

「おい、教えろよ。」

……ターゲットをお前1人で倒せたら

・・・わが子た
勝^{アシタ}たひ總文教^{アソブ}よ

ピカは長刀・三田月を手にして構えた。

「待て。」

「ん? なんだよ?」

一 わゝ渡した剣で戦え。

たんてき

語懶が戻るがモレバカリナ

卷之三

ピカはそう言つてクラースに渡された剣、『エンシェントブレード』に持ち替え構えた。

その時、背中から光の羽が出てきた。

「……可惡！？」

・・・ふつゝ、懐かしいな。

ピカはかなり驚いていた。

クラトスは小さい声でそう言つていた。

卷之三

「・・・自分で確かめろ。そのほうが記憶の戻りが早い。」

「ノーラ」

「ちっ、しつなつたやつてやる。『魔神剣』！！」

ビュン!!

(速い!!)

スパン!!

ウルフが一刀両断された。

(マジかよ!! 危険すぎだら!!)

ピカはこの剣の切れ味にかなり驚いていた。
と同時にかなり恐怖していた。

(この剣はやばいな・・・人前じゃ使うの禁止だな)

ガウウ!!

「!! 危な!!」

気がついたらウルフの一片が田の前にいて噛み付いてきた。
それにギリギリで、ピカは氣づき回避した。

(さて、どうするかな・・・ん?)

また頭に浮かんできた。

(これは・・・術?)

浮かんだのは技ではなく術だった。

(・・・やつであるか! -!)

ピカは詠唱をした。

ワオオ――――――――――ン――ン

そう呟えたらガルフ達はいつせいにビカに向かっていた。

「・・・輝く御名のもと

ピカとウルフ達の距離残り70cm

「地を這う汚れし魂に、裁きの光を雨と降らせん」

ピカとウルフ達の距離残り50cm

「安息に眠れ、罪深き者よ」

ピカとウルフ達の距離 30cm

「ジヤツジメン」――

辺りに光が落ちてきた

・・・俺はこの剣を扱えるのか?」

卷之三

この剣は自分は扱えるのかそれが不安だつた。
けれどクラトスがいすれ使えるようになると黙っててくれたので安心した。

「それじゃ、教えてもらおうか。クラトス、なぜ俺の過去を知ってるんだ？」

「ふつ、簡単だ。私はお前と他の世界で会つていてるからだ。」

「！・・・・・クラトスも別の世界の者なのか！？」

「違うな・・・・私はお前に初めてあつた、会つたことあるのは別の世界の私なのだ。」

クラトスがピカのことを知つていてる理由それは別の世界のクラトスが会つていてるからだつた。

「だつたら教えてくれ！・・・俺の過去を！・・・」

「・・・・私から教えることはできない・・・・介添え人だからな。」

「介添え人？何だよそれ？」

「自分で調べろ・・・過去のお前ならそうしていた。」

「！・・・・わかつた、自分で調べる。」

「安心しろ、私からは何も教えられないが、その世界の者が必ず教えてくれる・・・」

「・・・・ああ、絶対全て思い出してみせる！・・・」

ピカは決意した。
しかしいきなり

「・・・・ビリだこには？めだかちゃんに阿久根先輩と喜界島に球磨川は？」

と聞こえた。

「ん？？？あれー？さっきまでいなかつたのに？」

「・・・どうやらさつきの『ジャッジメント』での世界に一瞬だけ歪みができたらしいな。」

ピカとクラトスが話していると

「・・・ピカ・・・お前・・・何で生きて・・・」

と言われた。

「・・・？何言つてんだ？・・・もしかして俺と会つたことがあるのか！！」

「あるに決まつてんだろう！おまえは1年1組のピカチュウ・ライ

トーング、俺やめだかちゃんの友達だろ！！」

「・・・つづ・・・」

いきなり頭痛が襲つてきた。

ピカの頭の中に1つの言葉が浮かんできた。

「箱庭学園・生徒会・・・・庶務・人吉善吉・・・・うつ・
・・」

ピカはそれだけ言つと氣絶してしまつた。

「おっ、おい！？大丈夫かピカ！！」

「安心しろ・・・氣絶しただけだ。」

「そつか・・・前みみたいに死んだわけじゃないんだな・・・てかあんたは誰だ？」

「クラトス・アウリオンだ。とりあえず一緒に来てくれないか？話

がある。」

「・・・わかつた。」

クラトスはピカを担ぎ、人吉善吉と船に向かつた。

第4話（入隊試験 後編）（後書き）

今回は以上です。

てかピカの新しい剣強すぎたな（笑）
名前はエンシントブレードでいきます。

初めての別世界のキャラクターは、めだかボックスの人吉善吉くん
でした。

次回はどうするかな～・・・考え中で

では、また次回でーーー！

第5話（眠り、そして決意）（前書き）

クラ「……そういうえば作者、お願ひ」との期限は書いたのか?」

作者「あ……忘れてた……」

クラ「……」

作者「すいません!! 無言で剣を構えないで!! 剣を戻して!!」

クラ「はあ……キャラクターとオリジナルディセンダーは期限は無い……」

作者「けど、ある程度多くなつたら募集は打ち切らうと思います。」

クラ「ピカの姿は7月に入つたら、打ち切るので注意してくれ。」

作者「ちなみにピカは気絶してるので、今回はここに入つていません。では、本編どうぞ!!」

第5話（眠り、そして決意）

？？？？

ここは一体どこだらう・・・

何で、ここは真っ暗なんだらう・・・

何で、何も聞こえないんだらう・・・

そして・・・俺は何でここにいるんだらう・・・

ピカがいる所、そこは何も無く、何も聞こえなく、全てが真っ黒な
空間だった。

・・・あれ？

しかしいきなり空間が少しだけ歪んだ。

・・・小さいけど・・・明かりがでてきた・・・

そこに小さいが明かりが出てきた。

何だらう・・・何だか懐かしいな・・・

その光がピカにあたった・・・そこで、ピカの意識は途絶えた。

「……ん。」

目を開いたら、そこには海が広がっていた。

「目が覚めたか？」

誰かの声が聞こえた。

声が聞こえた方を向くと、クラトスと善吉がいた。

「ああ、でも何でここにいるんだ？俺は確か、コンフェイト大森林にいたはずだが？」

「……本当に覚えてないんだな……お前は俺の名前を呼んで氣絶したんだよ。」

「大方、記憶が戻ったのだろう……」

「記憶？……確かに少しだけ浮かんでるが……まだ全部じゃ無い氣がするんだ。」

「なるほど。……それはまだ他に善吉がいた世界から、この世界に来る者がいるのだろう。」

どうやら記憶を少し取り戻したショックで、ピカは氣絶してしまつたらしい。

しかし、それでも全てを思い出していないかった。

どうやら記憶が戻るには、この世界に来る者が集まらないといけないらしい。

「クラトスは誰が来るかわかつているのか？」

「すまないがそこまでわからない……」

「そうか……」

「・・・・・」
「・・・・・」

(き・氣まづい・・・)

クラースもピカも何も言わなくなつたので善吉は氣まづいこと思つてしまつた。

「・・・とりあえず、船内に入るべ。クエストのことと、善吉のことを報告しないといけないからな。」

「・・・わかつた。」

「えつ？ 何で俺のこと？』

クラースに船に入るぞと言われた。

ピカは返事をしたが、善吉は何で自分のことを報告されないといけないかわからなかつた。

「お前はにじの世界を何も知らないのだりつへだつたらじの船で共に行動をしたほうがいい。住む場所も確保できるしな。」

「なるほど・・・わかつた、行こうぜピカ！・・・

「・・・ああ・・・・・・！？」

ピカは立ち上がるうとしたがなぜか立ちにくかつた。

「じつやいらまだ動かしずらうよつだな・・・

「肩貸すぜ、ピカ。」

「・・・あつがとう善吉。」

ピカは、善吉に肩で支えてもらひ船に入つていつた。

「バンエルティア号・ロビーへ

今、3人はロビーに来ていた。

入ってきた時いたのは、アンジュとカノンとエミルだった。

「・・・わかりました。善吉君に住む場所を提供しましょう。」

「ありがとう。」

「ただし、働く者食うべからず……ちゃんと仕事もしてもらいますからね。」

「けど、仕事ってどんなのなんだ？俺はこの世界に来たばっかで全くわかんないぜ？」

「それはクラトスに教えてもらつて。

「わかった。」

「次はピカ君ね。クラトス試験の結果は？」

「合格だ。一人でウルフ全部倒したぞ。」

「ピカすごいね！」

とりあえず、善吉のことが終わり、次はピカのことがなつた。クラトスはピカが合格したことを話した。

そしたらカノンノにすごいと言われた。

しかし本人は・・・

「ああ・・・」

かなり暗くて空返事をしていた。

（ピカビウしたんだる？）

（わからんない・・・私とルバーブ連山にいた時は明るかつたのに・・・）

（船から出る前も明るかつたよ。・・・本当にびじうしたんだひづへ。）

Hミルとカノンノがこの返事に小ちこ声で話しあつた。

「・・・アンジュ、ピカは疲れているから早く部屋を教えてやつてくれ。」

「わかつたわ。ピカ君の部屋は・・・」

「わかつた・・・行かせてもらひつよ・・・」

セツヒツヒツピカは指定された部屋に向かつていつた。

（（（ピカ・・・・・）））

カノンノとHミルと善吉は同じことを思つて、同じく心配していた。

（ピカの部屋）

「・・・くつ・・・」

ピカは部屋についてすぐにベットに倒れた。

「頭がかなり重い・・・そしてかなり眠い・・・」

ピカはセツヒツぶやき田を閉じた。

～？？？～

「ん？」「は？」

ピカが田を覚ましたら、真っ白な世界にいた。

「田が覚めたか。」

声が聞こえた。

ピカがそちらを振り向くと、じいさんと女人の人人がいた。

『氣分はどうですか？』

「大丈夫だが・・・あんたら誰だ？」

「何じゃ、忘れたのか？神じゃよ、神。」

『私はマー・テル。世界樹の精靈です。』

名前は神とマー・テルらしい。

神はどこかであつた氣がするが忘れてしまつた・・・

「・・・さつきの神が言つからにしては、俺と会つたことあつそうでない方だな・・・」

「ワシは何回も会つているぞ。」

『私は3回ですね。』

なんとこの2人は自分と会つたことがあるらしい。しかも何回も。

「…なら俺の過去も知つていいだろ？！…教えてくれ！…」

「残念だが、ワシらから教えてはならんのじゃ・・・」

「何故だ？！」

『貴方の力を目覚めさせるためです。』
「俺の・・・力？」

ピカに記憶を教えない理由それはピカに力を目覚めさせるためだった。

しかしひかはあまり意味がわからなかつた。

『はい、記憶を無くす前の貴方はかなりの力を持つていたのです。』
「しかし、事故が起きて記憶を無くして、さらにその力までも封印されていたのじや。」

『私達が調べたには、力を戻す方法はただ一つ・・・記憶を取り戻すことです。』

『その方法は、1度会つたことある者と遭遇することじや。だからワシとマーテルで今、他の世界の者を呼ぶ準備をしておる。・・・こんな所じや。』

「なるほど・・・てことはいすれ俺の絶対に記憶は戻るんだな？」

『はい。だから少しの間だけ待つていてください。』

とりあえず絶対に記憶は戻るらしい
しかし気になつたことがあつた。

何で俺は記憶も無いのに飛ばせられたのか・・・それが気になつた。
「ところで何で、俺の記憶も戻つていないので他の世界に飛ばした
んだ？」

「それはルミナシアが滅亡の危機になつたからじや。」
「なるほどな・・・てカルミナシアって言うのか・・・」

今、世界の名前がわかつたピカ。

『そろそろ時間ですね・・・』

「もつそんな時間が……早いものだ……」

「時間で、何の？」

「田覚えの時間じゃ。」

「田覚え……くつー？」

急に何かに引っ張られるような感じがした。

『ピカ、今回貴方が人吉善吉と遭遇して記憶のかけらができました。』

『これによつワシらも他の世界の者に遭遇がしやすくなつたから安心して世界を救え。』

この言葉を最後にピカはどこかに引っ張つていかれた。

（ピカの部屋）

「はつ……」

ピカが田を覚ました。

「（ニ）は……部屋か。」

わざわざみたいに真つ白ではないのですぐに断言できた。

「……とつあえず外の空気が吸いたいな。」

ピカはそう言つて立ち上がり部屋を出た。

- - 移動中 - -

一
五
〇
〇
〇

外に出ると遠くに太陽が出て初めていた。

「……………」朝まで寝たまいたいんだ。

エハキハビカは、寝かぬ」の時間まですこし寝て、いたよ」た

卷之三

マニンの記憶を
ピカは思い出していた

「世界を救うか・・・あんまり自信が無いがやつてやるか！！」

ピカはそう決意し、まるで神たちに誓つようにつぶやいた。

ただし、そこちも絶対に思い出せやるよ……交換条件だからな

言い終えるとビカは船に戻つていつた。

第5話（眠り、そして決意）（後書き）

作者「今日は以上です。」

ピカ「あ～、やつと目覚めた。」

作者「お疲れ様。」

クラ「・・・今日はまとめ話か？」

作者「そんなもんだね。だつて書くことなかつたし」

ピカ「てか、俺達何で後書きで話してんだ？」

作者「なんとなくでやりたかったから。次回から開始ね。」

クラ「はあ・・・今日は以上だ。」

作者「次は日常話にします。」

ピカ「次回もよろしくな。」

第6話（新しい仲間と爆発）（前書き）

作者「前に好きなテイルズキャラクターのこと言つてたの覚えてる？」

クラ・ピカ「知らん……」

作者「ヒテヒ……」

クラ「でも、何で急にそんなこと聞いたのだ？」

作者「実は他にも好きなテイルズキャラいたんだ……（汗）」

ピカ「クラトス、こいつ斬つていー？」

作者「えつー？」

クラ「投稿できなくなるから駄目だ。」

ピカ「ちつ・・・・！」

作者「ちつ・・・・て、ヒドー！」

クラ「黙れ、早く好きなキャラクターを言え。」

作者「わかったから剣を構えないで……えっと、コレット・ティア・エスティル・マルタ・ガイ・フレン・リタ・セネル・ヴェイグの9人だね。」

クラ「合計18人か……」

作者「この18人とピカで他の世界に飛ばされた話を作りうと思つてるんだ！！」

クラ「どこに飛ばされるのだ？」

作者「秘密で……」

ピカ「死ね！（ヒンシ）ントブレード装備（）

作者「えつー・・・・

しばりくお待つください……

作者「……（血だるまで氣絶中）」

クラ「むごいな・・・」
ピカ「みねうちだ。とりあえず本編スタートーー！」

第6話（新しい仲間と爆発）

「ふう・・・」

「」はピカの部屋。

今、外から部屋に戻つた所だ。

「とりあえず、記憶の確認するか。」

そう言つてベットに座り、丼をつぶつた。

（・・・俺が今まで使つていたのは異能といつか・・・『電力』・『空』・『光』そして新たに『磁力』か・・・）

ピカは新しく『磁力』の異能を使えるようになつた。

（そして、善吉のことと・・・箱庭学園の名前、生徒会のメンバーの名前だけ・・・）

善吉のことは思い出していたけど、他の生徒会のメンバーの姿はあまり思い出せなかつた。

（んで、俺の新しい力・・・『『ピースアイ』か）

ピカは『ピースアイ』を手に入れた。

（『ピースアイ』は・・・見たのをマネできる力か・・・）

『ピースアイ』のくわしい説明は後々します。

「そりいえば荷物も増えてたな……確認するか。」

荷物を調べてみた。

「これは……ギター？」

出てきたのはギターだった。

「……戦闘に使えないだろ？……」

とりあえずしまった。

次に出てきたのは石だった。

「これは……エクスフィアだったような……」

名前以外よくわからなかつた。

「最後は……かなりの数の鉄と水銀か……」

最後は沢山の鉄とビンに入った水銀だった。

「こいつは使えそうだな。」

『磁力』はこの2つを使って戦えるらしいのでかなり嬉しかつた。

「……このくらいか。」

「ピカ一、起きてる？」

廊下からカノンノの声が聞こえてきた。

「ああ、起きてるよ。」

「じゃ、入つていいいかな？」

「いいぞ。」

カノンノが部屋に入つてきた。

「ピカ、アンジュさんが呼んでるよ。」

「そうか、すぐ行くよ。」

「わかつたよ。・・・ピカ・・・・」

「ん? どうした?」

「昨日はどうしたの? 昨日、ピカの部屋に入つたら寝てて、それい
らい起きなかつたし・・・」

(心配せなかつたか・・・)

どうやら昨日はカノンノをかなり心配にさせたらしい。

「クラースさんに聞いたらピカに聞けつて・・・トミックスはよく
わからないうて言つたたし・・・何かあつたの?」

「ああ・・・少し長くなるけどいいか?」

「うん・・・」

「ちょっと待つて! -!」

「エミル! -! マルタ! -!」

入つてきたのはエミルとマルタだった。
ちなみに止めたのはエミルだ。

「どうしたんだエミルとマルタ?」

「僕もそのことを知りたいんだ。教えてよピカ。」

「私はエミルについてきたんだけど・・・私も聞きたい。」

「・・・わかつた・・・話そ。」

カノンノとエミルとマルタに今までのことを話した。

「これが今知つている現状だ。」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

ピカは今までのことを話した。
3人は黙つたままだつた。

「信じられないだろ?」

「・・・僕は信じるよ。」

エミルはそう言つた。

「エミル・・・」

「何たつて僕達は友達だもん。ピカのことは信じてるしね。」

「私も信じてるよ。」

「マルタ・・・」

「ピカが嘘つくる人には見えないもん。だから信じるよ。」

「私もだよ、ピカ・・・。」

「カノンノ・・・」

「ピカ、私はどんなことがあつてもずっとピカを信じてるよ。」

カノンノとマルタもそう言つてくれた。

「・・・・・3人ともありがとう。」
「・・・どういたしまして！！」

ピカはかなり嬉しかつた。

とても信じがたい話をしたのに、3人とも信じてくれたので。
そしてこの4人の話を廊下で聞いていた人がいた。
クラトスだ。

（ふつ・・・昔のお前もあんな所があつたな）

彼は昔のピカを思い出していた。

（いつもは皆を楽しませて、苦しいことは1人で背負い、皆に聞かれて話す。・・・あいつはいつもそうだった・・・今回こそは苦しみを1人で背負うなよピカ・・・いや、友よ・・・）

クラトスはそう思いロビーに向かつた。

「さて！…アンジューさんに呼ばれてるし行くか！…」
「「「うん！…」」

4人もロビーに向かつて行つた。

（バンエルティア号・ロビー）

「アンジューさん。用事つて・・・あなた達は？」

ピカ達はロビーについた。

そこにはアンジューと2人の女性がいた。

「彼女達は新しくギルドに入った人たちよ。」

「へへ、なら自己紹介だな。俺は、ピカチュウ・ライトニング。」

「私は、カノンノ・グラスバーです。」

一 僕は、エミルギヤステーク

私にはマ川タ・川ア川テイ

おかしは こどり て くわん て くわん じくわん

卷一百一十一

女性達はガガリーリとバーバードといふらし

ビカはナナリの顔を見て、次はノロノトの顔を見た瞬間がなりの冷や汗が出てきた。

（な・・・何だこの感じは！・・・初めてあつたのにかなりの恐怖感が・・・）

ビカがかるく震えていると

「あら？ あんた、ピカチュウだつけ？ なかなか実験に使えそうな体してるじゃない」

と言われたしまつた。

その瞬間、ヒカルの体が勝手に動き走っていた。

（…へこなす逃げ速…）

と思いながら甲板に向かつて走っていた。

「グフフフ逃がさないわよー！」

と黙つてピカと同じく甲板に走つていつた。

「あーー！「コラハロルド！！」

「ピカ・・・大丈夫かな？」

「とりあえず、追いかけよう！！」

ナナリーが止めようとしたがもういなかつた。
カノンノが心配していると、エミルが追いかけようにながした。

「そうだねーー！追いかけよう！！」

「あたしも行くよ。あたしが止めれなかつたせいでもあるからね。」

「私はクエストの整理とかあるから行けないけど頑張つてね。」

アンジュがそう言つた後、4人でピカとハロルドを追いかけようと
した時

ド――――――――――――――――――

かなり『デカイ爆発音が聞こえてきた。

「えつーー？何の音？」

「多分ハロルドの爆弾だと思つーー急いでーー！」

4人は走つて甲板に行つた。

ちなみにナナリーが後で説教してやると呴いていたのは余談だ。

4人が外に出た時、その場にいたのは氣絶して倒れているピカとハ
ロルドと赤いコート着た少年と大きな鎧がいた。

（数分前のバンエルティア号・甲板）

「はあ、はあ、はあ。」

ハロルドから逃げるために船外に出たピカがいた。

「しかしこれじゃ、袋のネズミじゃないか！！」

しかし急いで逃げたかったのか甲板に出てしまった。

「どうしよう・・・」

悩んでいると

「逃がさないわよーー！」

ハロルドが出てきた。

「ヤバイ！！」

「さつさと実験させなさいーーー！」

デカイ注射をこっち襲わせてきた。

（ひつなつたらこれしかねえーーー）

ピカはポーチに手を突っ込んだ。

ザクー！

デカイ注射が刺さつた・・・・・鉄の壁に・・・

「あら？ 何処から出したのそれ？」

「秘密だ・・・」

「なら意地でも調べてみせるわーー！」

そつ言つて沢山の注射を投げてきた。

「あまいなーー！」

ピカは鉄の壁を操つて、壁を伸ばした。

「・・・なるほどね・・・そいつは水銀でしょ？」

「・・・正解だ・・・よくわかつたな。」

「さりにあんたの何らかの力で水銀を動かしていりようつね・・・

「まさかそこまでばれるとはな・・・」

「当然よーーなんたつて、私は大天才科学者だからね。そんなのす

ぐに見破れるわ。」

「関係ないとと思うが・・・」

ピカが呆れていると・・・

「チャンスーーくらえ、新作爆弾ーー！」

ハロルドがそつ言つて爆弾を投げてきた。

「危なーー！」

ピカはギリギリ避けた。

しかしその爆弾が地面に当たった瞬間、辺りが光に包まれた。

「なつ！！」

「へつ？」

その後大きな爆発音が聞こえ、目の前が暗くなつた。
そしてカノンノ達が見たように氣絶して倒れているピカとハロルド
と赤いコート着た少年と大きな鎧がいた。

第6話（新しい仲間と爆発）（後書き）

クラ「今日はこれくらいか……しかし、作者とピカが氣絶中か……」

ただいま2人は氣絶中

ピカは本編中、作者は前書きで。

クラ「……1人では荷が重いので新しく人を増やした……エミルだ。」

エミ「ど・どうもこんにちは……」

クラ「今回から4人でこのコーナーをしていくので読者の皆様もよろしくな。」

エミ「そういうばクラトスさん、今回出てきた小さい少年と大きな鎧つて……」

クラ「ああ、あの2人だ。」

エミ「やつと出せたんだね……よかつた。」

クラ「ああ……次回はあの2人と話すことになるだろ。」

エミ「こ・今回はここまでです……あ・ありがとうございました。」

クラ「次回もまたよろしく頼む……」

番外編（ペカの休日のおしり方）（前書き）

クラ「投稿を遅れた理由を聞こつか……（剣を構る）」

作者「実は……急にデスクトップとノートパソコンがインターネットにいけなくなつたんだ……」

エミ「えつー？ そんなことがあつたのー？」

作者「うん……しかも現在進行中……」

クラ「なら仕方が無いな……けどこの話はどうやって投稿したのだ？」

作者「何回か抜き差ししてようやく点いたんだ。」

エミ「なるほど……でも本編ならべつの所でも書けない？」

作者「書いてたんだけど……今、点かないノーパソの方に書いてた……」

クラ「エミ」「…………ドンマイ…………」

作者「皆さん、投稿遅れて本当にすいませんでした……本編どうぞ。」

番外編（ピカの休日のおしゃし方）

今日はピカの休日の過ごし方の一つを見てみよう。
(この話は、本編から未来の話です。)

AM8：30 起床

「ふあ～・・・朝か。」

AM8：50 朝食

「ロックス今日も『』飯が『』いな。
「ありがとう』『』ぞこます。『』ザートに『』ン『』もいかがですか？
「いただきまーす！！」

AM9：30 訓練

「来い！－！クラトス！－！」
「ああ！－！『』瞬迅剣』『』
「あまいな！－！よつと。」

ピカはクラトスの『瞬迅剣』をかわして剣をクラトスの肩を狙つて
振つた。

「そつちもな。」

クラトスはそれをよんでいたのかしゃがんでかわした。

「さすがクラトス！－！・・・『』雷鳴』『』」

『電力』の力で、電気の鳥を造りクラトスに向けて放った。

「『粋護陣』」

クラトスは『雷鳥』を『粋護陣』でガードした。

「ここまでだな。」

「そうだな・・・」

AM11:00 読書

「・・・・・・・・」

ピカが読んでいるのは三国志の小説だ。

「・・・・・・・・」

AM0:00 昼食

「ロツクス、この料理何?」

「カレーですよ。」

「了解。 いただきま～す・・・」

「お味はいかがですか?」

「・・・・・・」

「ピカさん?」

「か」

「からい」

「か?」

「からい」

「ええ！？」「れ中辛ですよ！？」

PM0:30
昼寝

「ZZZ...」

一 ビカまた寝てる。

脅寝をしているピカの前に現れたのはカノンノだつた。

そう言つてカノンノがピカに近づいていつた。

もう少しの所でピカが目を覚ました。

「・・・ そうだ！ カノンノも一緒に寝しない？」
「えつ／＼う・うん／＼／

この後ピカの寝相の悪さでカノンノに抱きついてしまったのは余談

だ。

P
M
3
:
0
0

甘

「ビカさんば、辛いのが苦手で甘いのがお好きなんですね・・・」

デザートのケーキを幸せそうに食べていた。

PM4：00 闘技場

「俺様がチャンbara」壊れなーーー！」

「ソングマンが5時近くまで技の実験台にされていた。」

PM 7:00 夕食

「もぐもぐ・・・美味しい～。」
「甘い味付けにしておきましたから。」
「ありがとうロックス！！」

PM8:00 風呂

「勝負だシングー！」
「うん……どっちが長く風呂に入つていられるかだね……。」
「ああ、こゝへせーーー！」
「うんーーー！」

この後仲良く2人でのぼせました。

PM10：00 善吉のファッショントヒック

「リリをいつして……サタンカッケ————！」

「善吉……0点。」

「な・お前にはこのカツコよさがわかんないのか！？」

「うん。」

「くつそ————！」

「善吉つるわい。」

PM11：00 就寝

「おやすみ……」

これがピカの休日の過いし方の一つだった。

番外編（ピカの休日のすゝみ方）（後書き）

作者「よし・・・」んなもんかな。」

ピカ「これって俺の休日の方か？てか、どうやつてこの場所に来た・・・？」

作者「秘密。てか急いで話考えるから後ようしきーーー。」

ピカ「久々にまともだな・・・それだけパソコンの件がショックらしいな・・・ん？」

足元に紙が落ちていた。

ピカ「どれどれ・・・パソコンの件でもしかしたら投稿が遅れるかもしませんか・・・読者の皆様このことはよろしくね。んじや、今回はここまで。ありがとうございました。」

第7話（鋼の錬金術師・前半）（前書き）

作者「7話投稿完了！…疲れたら。」

エミ「お疲れ様。」

作者「ありがと…・・・ヤバイ！…学校が後よろしく…！」

エミ「えつ！…ちょ！…・・・・ほ・本編どうぞ…！」

第7話（鋼の鍊金術師・前半）

目を覚ますとピカはバンエルティア号の医務室にいた。ピカは、なぜ自分がここにいるのかが全くわからなかつた。

（しかも誰もいないし……）

周りを見渡すと、本来ならばアニーがいるはずなのに何故かいなかつた。

（……とりあえず、なにがあつたか思い出すか……）

そう思つてピカは目を瞑り、思い返してみた。

（確かにこの船にナナリーとハロルドが新しく入つて……そして、ハロルドが何故か怖くなつたから逃げたら追われたんだ……）

思い出しただけで、体が震えてしまつた。

（……さらにハロルドが攻撃してきたから異能の『磁力』で対応してたら……爆弾を投げられて氣絶したと……）

あればびっくりしたなーと思つていると、医務室の扉が開いた。入ってきたのはカノンノだつた。

「あ、ピカ目を覚ました？」

「ああ、何とかな。」

笑いながらそう言つた。

そういえば、ピカはどのくらい眠っていたのかわからなかつたので聞いてみた。

「そういえばカノンノ、俺はどのくらい気絶してたんだ?」「えつと・・・朝は全部気絶してて今は、昼の始まりくらいだよ。」

「そうか、ありがとう。」

「そういえば、船に新しい人が来たから挨拶しに行かない?」

「ああ、わかつた。」

そう言って、ピカはベットから降りて、カノンノと一緒に新しい人の部屋に向かつた。

「カノンノ・・・」めんな。

「どうしたの急に?」

「いや・・・また気絶したから・・・」

「・・・ならさ、今度の休みに一緒に街に行こうよ。」

「わかつた。約束するよ。」

また気絶してしまつたので、ピカはカノンノに誤つた。そしたら、カノンノに街に行こうと誘われた。気絶の件もあるので約束した。

「約束だよ。・・・あつ、この部屋だよ。」

カノンノと話していたら目的の部屋に着いた。

「よし!入るぞ、カノンノ!..」

「うん!..」

「お邪魔します!..」

ピカとカノンノは、目的の部屋に入った。

中に居たのは、赤いコートを着た小さな少年と大きな鎧を着た人？と善吉とクラトスがいた。

「この船の船員のピカチュウ・ライトニングと…」

「カノンノ・グラスバレーです。よろしくね。」

「俺は、鋼の鍊金術師エドワード・エルリック…！」

「僕は、アルフェンス・エルリックです。よろしく。」

「てか、クラトスと善吉は何でいるんだ？」

赤いコートを着た小さい少年はエドワード・エルリックで、大きな鎧を着た人はアルフェンス・エルリックだった。

ピカは、クラトスと善吉がなぜここにいるかわからなかつたので、聞いてみた。

「お前を待つてたんだよ、ピカ。」

善吉はそう言つた。

「どういうことだ？」

「この2人は別の世界の者なのだ。」

「…？…でも、俺の体に何ともないぜ？」

ピカの体に何の違和感は無かつた。

「…やはりか…」

「ああ…」

「クラトス。お前理由知つてるのか？」

「クラトスさん教えてください…！」

クラトスは理由を知っていたのでピカとカノンノは理由を教えてくれるようになつた。

「どうやらこの2人は、お前と会つたことが無いようなんだ……」「……？」

クラトスは教えてくれたが、その内容にピカとカノンノは驚いた。

「本当なのか？エドワードさん、アルフェンスさん？」
「ああ、俺達2人はお前に会つたことも無いし、聞いたことも無いぜ。なあ、アル？」
「うん。」
「マジかよ……」

ピカはかなり落ち込んだ。

「でもなんでこの2人はこの世界に来たんだ？」
「わからん……今日にでもあの2人に聞くつもりだ……」
「そうか……わかつたら教えてくれ。」
「エド君、アル君……丁度いいや、善吉君と、ピカ。ちょっといいかな？」

ピカとクラトスがあの2人に聞き出すことを話しているとアンジューが部屋に入ってきた。
アンジューは、最初は2人だつたけど、ピカと善吉を見つけると2人も呼んだ。

「どうしたんだアンジューさん？」
「今から4人に依頼に行つて欲しいの。」
「依頼？」

「ええ、『コンフュイト大森林で魔物を30匹討伐』て依頼。」

「魔物……てことは自由でいいのか？」

「うん。受けてくれるかな？」

アンジュがそう言つた瞬間、アンジュの後ろから鬼神が出てきたよう見えた……絶対受けろってことか……

・

（怖！？……うわ……他の3人も震えてるし……俺もだけど……）

「わ・わかりました。受けます。」

とりあえず俺は受けることにした。

「ピカありがとうございます。3人は？」

「「「受けます！」「」」

「それじゃ、よろしくね。」

ピカは、クラトスとカノンの所を見ると2人とも苦笑いしている。

（何回もあったぽいな……）

とりあえず、アンジュには逆らわないでおこう……

第7話（鋼の錬金術師・前半）（後書き）

ピカ「やつと目覚めた・・・」

エミ「お疲れ様。とりあえず・・・」

ピカ・エミ・クラ「やつと出せたな（ね）・・・」

ピカ「次は誰出すんだろ？？」

エミ「わかんない？」

クラ「資料によると・・・若き虎？」

エミ「虎！？」

ピカ「・・・あいつじゃねえ？ほら、いつも親k「ネタばれ、ネタばれ。」ゴメン。」

クラ「はあ、今回はいいまでだ。次回もよろしくな。」

第8話（鋼の錬金術師・後編）（前書き）

作者「いきなりですがピカの戦闘タイプを無くしました。」

ピカ「はあ！？ 何でだ！？」

クラ「理由があるのか？」

作者「うん。ピカは異能や素手でも戦えるし、決まりがないんだもん。」

ピカ「マジかよ・・・」

作者「というわけで、戦闘タイプ無くしました。後、好きなものと嫌いなものも更新！！」

クラ「では、本編始めるぞ。」

「コンフェイト大森林」

「ここは・・・俺とピカがこの世界であつた所だな。」

「・・・修行時代を思い出すなアル。」

「う・・・うん。」

「そうだな・・・エドとアルはどうしたんだ?」

善吉が辺りをみわたしていく、エドとアルは震えていた。その様子にピカは疑問を覚えたので聞いてみた。

「い・いや、何でもない。」

「う・うん。」

「何でもなくないだろ?、何なら船に・・・は無理か。」

クエストもせずに帰つたら鬼のアンジューさん出ると感じたので断念した。

「とりあえず、行くぞ。」

「「ああ。」「うん。」

俺達4人は森の中に進んだ。

その時、木の上に誰かいたが、エド達は気づかなかつた。ピカを除いて。

（木の上に誰かいるな・・・害があるなら捕まえるか。）

ちなみに木の上にいた人は

(あの人は・・・！那に報告だ！！)

そう思い、自分そつくりの人を出してどこかに行ってしまった。

(2人になんて・・・いや、分身か。)

そう思いながら歩いていると、ブチブリ達がいた。

「ピカ、こいつを倒すのか？」

「ん？ ああ、そいつを倒すんだ。」

「んじゃ、早く倒して帰ろうぜ。」

「うん。」

ピカは剣を構えて、善吉とエドとアルも構えた。

「善吉はわかるけど・・・2人も素手なのか？」

「違うぜ。」

「・・・どうゆうこと？」

「見てればわかるぞ、行くぞアル！！」

エドはそう言つて、手を合わせ、地面を叩いた。

その瞬間ブチブリのいる地面からたくさん棘が出てきてブチブリ達を倒した。

アルもエドと同じことをして、同じくブチブリ達を倒した。

「・・・えつ？」

ピカとはかなり驚いていた。

エドとアルは

「お～、リリの世界は土でも塗せるんだな。
確かにすうじいね兄さん。」

普通に話していた。

善吉は

「鍊金術やっぱスゲェ……」

と言っていた。

「2人とも……今の何？」

「何つて、鍊金術でけど?話してたろ?」

「兄さん、ピカチュウさんとカノンノさん」は話していないだろ。」

「あつ、そっか。」

「うやうやしくは忘れていたようだ。」

「俺達は鍊金術って書いつのは……」

-10分後-

「なるほどな……」

「わかるのか?」

「微妙にだがな。」

「じゃ、説明してみてくれ。」

「……さすがにまだ無理だ……」

まだしつかり理解できていないのでそれは無理だ。

「とりあえず、鍊金術は物体の再構築ができるのか？」

「うそ、そうだよ。」

「俺達にもできるのか？」

「それはわかんないかな・・・。」

「じゃ、マネだけでもやってみるか。」

ピカはさつ言いつとヒド達のよひ手をあわせた。

「ピカ、俺達が手をあわせてできるのは真理を見たからできるんだ。見てないからお前はできないぞ。」

「やつてみないとわからないだろ。」

ピカは、両腕を地面につけた。

その瞬間さつものヒド達みたいに地面から無数の棘が出てしまった。ちなみに向凹かのブチブリ達に命中していた。

「お～できたできた。」

「・・・。」

「・・・。ん？」

「どうした？」

「お前なんで真理も見てなーのにできるんだー。」

「僕達は見てよけいできるのー。」

「し・しらねえよ・。」

自分でさつてみたりできたので、ピカが困っていた。

「なあ、ピカ。」

「どうした善吉？」

「それつて『創造の腕』だろ。お前昔からできただろ？」

「・・・・・は？」

「あつ・・・・止められてたのは忘れてた。」

「どうやらピカに備えられた力の一つらしい。」

「『創造の腕』ってどんなのだ？」

「ん・・・・喋つていいのかな？」

「もう名前も言つてるし大丈夫だろ。」

「そもそもそうだな。『創造の腕』てのは・・・

・3分後・

つて、昔のピカが言つてたぜ。」

「ふうん。望んだものを創り出せる力ね・・・」

「後は鍊金術と同じで人間とかはできない・・・」

「鍊金術とは近いもので近くないんだね。」

3人で『ミニックス』の話を聞いて、まとめていた。

「とりあえず、そろそろ夕方だし、さつと終わらせよつぜ。」

「そうだな。」

「早く帰つて寝て〜」

この後、ピカがエンシントブレードで敵を切りまくり、エドとアルがが練成で敵を倒しまくり、善吉がサバットで敵を蹴り倒したりしてすぐに終わつた。

「さて、帰るか。」

「ああ、俺は少し用事あるから先に帰つてくれ。」

「わかつた。」

「早く終わらせてね。」

エド達は船が下りるところに向かつた。ピカは3人は見送ると森の方を向いた。

「そりそり出でたらどうだ。」

「・・・・やつぱり氣づかれてたか・・・」

そつ言つと、迷彩服ような服を着ている人が木の上から地面に下りてきた。

「何者だお前は？」

「は？ピカの旦那、何言つてんですか？」

「・・・お前は俺のことを知つてゐるのか？」

「当たり前じやないですか・・・何かあつたんですか？」

「・・・他の世界に転生中で事故がおきて記憶を失つてしまつたんだ・・・」

「マジッすか！？治る方法は無いんですか？」

「名前を教えてくれ、あんたが昔会つたことあるならそれで思い出せる。」

「わかりました。俺の名前は・・・猿飛佐助です。」

「コンフェイト大森林・奥地」

「ピカ・・・お主はいったい何処にあるのだ・・・」

頭に赤い鉢巻をつけ、上半身はライダースジャケットをつけ、下半身は赤い具足をつけた男がそう言つた。

その時

「旦那、ピカの旦那を見つけました。」

ピカの所にいるはずの猿飛佐助が姿を現した。

「何!? それは真か、佐助?」

ええ、本体が確認したら自分がヒカル名乗りました。

佐助この間那と書ひてた男は本を振るつせぬわ」と、
とハサハ彼は分身らし。

「...」

「三日後、今、道三又、三、山へ

「わかりましたから落ち着いてください

の入り口近くにいます。」

そう言って、男は走り出した。

「あーーー曰那待つてくださいよーーー！」

佐助も急いで追いかけ始めた。

(ピカよ・・・某の六文銭とピカのクルシスの輝石と誓いを果たす
ため・・・)の真田雪村、今お主に会いに行く!—)

作者「今日はここまで。」

ピカ「でたな。」

エミ「でたね。」

クラ「でたな。」

作者「だしたよ。」

ピカ「真田雪村と猿飛佐助は戦国BASARAのだから注意な。」

作者「あの2人はBASARAで1番と3番に好きだから出したかつたんだ。」

エミ「じゃ、2番は誰なの？」

作者「伊達政宗！！」

クラ「そいつも出すのか？」

作者「余裕！！」

ピカ「いつ出すんだ？」

作者「…………まだ未定（泣）」

ピカ「…………早めに考えろよ。」

作者「わかってるよ！後、次週はお休みします。」

エミ「どうして？」

作者「学校でテストがあるから。」

クラ「どうせいい点何かとれないだろ？…………」

作者「うるせー！最後にピカの能力の説明します。次回もよろしくね。」

「ピーアイ

一度見た技・動きをマネできるようになる力。

（例えマネができるようになつてもその武器・動きができなくてはマネできない）

創造の腕

自身が望む物や、必要な物を作り出す力。
(人や生き物は造れない。)

番外編（気がついたら5000PVなので書いてみた）（前書き）

今回は番外編です。

作者達は本文から出てきます。

今回の主人公はヒルです。

では、本編をじりーー！

番外編（気がついたら5000円ので書いてみた）

「うむある一つの居酒屋、やうの店の店主エミル・キャスターは皆の愚痴を聞いてくれることで有り、皆からよやじ・・・ではなくエミルと呼ばれている。

今田もエミルは店を開き、料理の仕込みをしていた。

「今日は誰が来るのかな・・・」

その時、店の扉が開いて1人の客が入ってきた。

「すいませ～ん、ゴロゴロ～」

「いらっしゃい、ゴロゴロつまごど～」

客は作者だった。

作者は近くの席に座った。

エミルは冷蔵庫からゴロラを出した。

「作者、一つ聞いていい?」

「ん? 何?」

「何でいきなり5000円なの?」

「べ・別に今までゴロの見方がわからなかつたんじやないんだからねーーー」

（うせえ・・・・・）

エミルがそう思つてみると

「エミル～何でこの世にテストなんてあるんだよーー

「いや・・・僕に言われても・・・
「あ～～！！勉強なんてしたくない～～～！」
(絶対にテストの点数わるかつたんだね・・・)

作者の愚痴を聞いてるとH/M/Hは一つ思い出しがたかった。

「作者・・・年20超えてる?」
「超えてないよ。」
「帰れ。」

そのまま作者は追い出されました。(ドアを渡して料金も取りました。)

「全く・・・なんで来たんだよ・・・(怒)」

作者のせいでラタスクモードになりながら愚痴ついたら、扉が開いた。

「H/M/H、焼き鳥と焼酎を頼む・・・」

ヴェイグが入ってきた。

「まいどーー！」

エミルは焼き鳥の料理を開始した。

ヴェイグはさつきまで作者が座っていた席に座つた。

「エミル……俺は本当に作者の好きなキャラに入っているのか……？」

「入ってるけど……どうしたの？」

「ならなぜ俺がいまだに本編に出演していないんだ……？」

「い・いや、僕に言われても……」

エミルの言つとおりである。

「くつ……」とでこつもセネルと話し合つてゐるのだぞ……

（そういえば2人とも本編ではもう船にいることになつてゐるんだつけ……）

ただ出すタイミングがないだけです。

「くそ、作者を今度見つけたら制裁してやる……」「作者なら数分前にみたけど。」

エミルがそう言つとヴィエイグは立ち上がつた。

「エミル……金は払つておく……」

ヴィエイグは剣を抜いて外に向かつて走つていった。

「……作者大丈夫かな……（汗）」

エミルがそう呟くと、また扉が開いた。

「エミル、何か適当に頼む。」

ユーリが入ってきた。

「いらっしゃい、枝豆と焼き鳥でいい？」

「ああ、別にいいぜ。」

エミルは先ほど焼き鳥をすぐに出して、枝豆を洗った。

「エミル……俺つて早めに出るはずだよな？」

「ん、確かに本来の道すじならすぐに出てもいいはずだけ……

「だよな……何でまだ出ないんだよ……」

「作者のせい……かな。」

「……あいつ殺す。」

ユーリは今にも剣を抜きそうだった。

その時

「エミル……作者はどちら側に行つたんだ……」

ヴェイグが行きよじよく扉を開いて登場した。

「一応東の方……ユーリ？」

ユーリに黒いオーラが見えた。

「エミル、金は置いとく……ヴェイグ……行くぞ。」

「あ・ああ・・・・・（汗）」

2人は東の方に向かっていった。

その時

「エミル……何でユーリに黒いオーラを纏つてたんだ？」
「聞かないほうがいいぞ……」

ピカとクラトスが店に入ってきた。

「ちょっと制裁にかな……」

「誰の？」

「……作者。」

「「ああ……」」

2人はすぐに納得した。
2人は近くの席に座つた。
エミルは一つ思い出した。

「そういえば、ピカは16じゃなかつたっけ？」

「そのことなんだが、それは本来の年齢じゃないんだ。」

「……どういうこと？」

「クルシスの輝石は体の成長を止める能力があるんだ。」

「一応私もつけてるので、私も同じだ。」

エミルは気になることがあった。

「じゃ、2人はいくつなの？」

「俺は23くらい。」

「……4000。」

「……え？」

エミルの顔がかなり驚いた顔になつていた。

「？？？？？？？？？？」

エミルはかなりでかい声で叫んでしまった。

2人は耳を苦しそうに押さえていた。

「と・とりあえず、ピカは入つて大丈夫なことはわかつたよ。」

ああ…そこへいえは1――疑問点があつたんだが

「アーニングの問題」

「それは私も気になつていた。」

・ そ れ な ま に も 、 物 事 は が 一 へ 一

גְּדוּלָה מִזְמָרָה יְהוָה בְּנֵי יִשְׂרָאֵל

2人はユーリ達が向かつたところに行つた。

・・・・・ 今日せやうに此處に来ておひつわづかう

今日も一日昔の愚痴？を聞いたエミルだつた。

ちなみに次の日の朝に、公園の「ミニ箱」にテストの答案の山の中に血だらけで作者がいたのは余談だ。

番外編（気がついたら5000円なので書いてみた）（後書き）

今回は珍しまでです。

テストの結果が酷くてとても泣きそうです（泣）

今回のコーリはかなり怒っていましたね・・・・それから本編通りに書かないとな（汗）

次回もお楽しみに！！

第9話（若虎虎ヒ影）（前書き）

作者「ようやくインターネットが点いた・・・」
ピカ「まだ回線が悪いのか?」

作者「多分・・・」

エミ「多分つて・・・(汗)」

作者「だつてわかんないんだもん・・・(泣)」
クラ「それならば修理してもらえばいいだろ?」

作者「・・・金が無い・・・」

ピカ・エミ・クラ「はあ・・・」

作者「今、無一文つて思つたるつーー。(怒)」
ピカ・エミ・クラ「別に・・・」

作者「・・・もういい!!本編スタートーー!(泣)」

第9話（若き虎と影）

「わかりました。俺の名前は・・・猿飛佐助です。」

ピ力に頭痛が襲い掛かってきた。

(くそつー？またこの頭痛か！？)

ピカが痛みで悶えていると

「ちょ！？ピカの旦那大丈夫ですか！？」

佐助が驚いて聞いてきた。

「大丈夫……だから……安心して……くれ……」

「大・・・・丈夫だ・・・・」

ピカが必死で隠そうとしている

誰かの叫び声が聞こえてきた。

ピカが意識が途切れかけて目をつぶろうとした時

「いいいいいいかああああああちゅうううううう」――

真田雪村が走ってきた。

そして

ピカを思いつきり殴った。

威力が高かつたのか、ピカは遠くに飛んでいつてしまつた。
ちなみに佐助は雪村の行動にかなり驚いたのか停止していた。

デカイ声で雪村に突っ込んだ。
たいして雪村は

「ああ、ピカー！」の雪村に熱い拳を当てに来る。」

とスルーしていた。

コンフェイト大森林・船の手前

卷之三

善吉とエドとアルは困っていた。
理由は船の近くについた瞬間に、空からいきなりピカが降ってきた
からだ。

(これ・・・どうしたらいいかな2人とも?)

（俺は聞くなよ！）

(と い あ え す 拡 ひ ん は 2 人 と も)

と小さい声で話しかけていると、ピカがいきなり動きだして、地面から顔を出した。

か聞いてみることにした。

エドとアルがそう聞いた。

• • • • • • •

しかしピカは何故か何も喋らずに、ピクリとも動かなかつた。次の瞬間、ピカは立ち上がりつて森に走つていつた。

3人はそれを見ていることしかできなかつた。

「コンフェイト大森林・エリア1の奥地へ

「旦那どいつもするんですか！…せつかくピカを見つけたのに殴り飛ばすなんて！…」

「う・うむ、少しやりすぎた…」

今、雪村は佐助に説教されていた。

理由は雪村がピカを殴り飛ばしたせいで、ピカがどこに行つたのかわからなくなつてしまつたからだ。

「しかもピカが頭痛に悩まされている時に殴つてるし…」

「なるほど、だからピカは避けずに当たつたのか！…」

「納得してゐる場合じやないですよ！…」

「う・うむ。」

「はあ・・・とつあえず、ピカを探しに行きますよ旦那。」

「ああ…行ぐぞさす『雪村……………』

「…』ピカ…」

雪村と佐助が声のする方を向くとピカが走つてきていた。

雪村はピカを見ると、ピカの方に走りだした。

2人は両手を横に広げて、青春映画などにありそうな抱きしめあつ ようなシーンなことをしようとしていた。

普通の人ならば・・・

2人は30cmくらいになると拳を握り締めて

殴り始めた。

そして

雪村

「雪村」――――――――――――――――――――――――――――

雪村

ヒカル

殴り合いを始めた。

ちなみに佐助は

「・・・・・・・・」

呆然とその光景を見ていた。

この殴り合いは2時間後に帰りが遅いので、探しに来たクラトスとカノンノにジャッジメントとインブレイスエンドをされてようやく止まつたのは余談だ。

第9話（若き虎と影）（後書き）

作者「うーーー・・・・ やつと本編書けた・・・」

エミ「お疲れ様。」

ピカ「一つ聞きたい」とあるんだがいいか?」

作者「何?」

ピカ「そろそろ本当の物語通りにまだしないのか?」

クラ「前にユーリに襲われたの忘れたのか?」

作者「忘れるかけがないだろつ・・・・・ 次回は本編にするよ。」

エミ「やつとだね・・・ (汗)」

ピカ・クラ「だな。」

作者「うるさい!—次回もよろしくね!—」

ピカ「ちなみに、またネット回線が悪くなる可能性があるので、更新が遅れる可能性があるのでそこのところもよろしくな。」

番外編（オリキャラ発表会）（前書き）

作者「今日は10000円と1500円一軒の記念です……」
クラ「いろいろなオリキャラが出来るから楽しみにします。」
ピカ「じゃ、番外編行くぜ……」

番外編（オリキャラ発表会）

ピチュー・ライトニング
髪 黄色（毛先が黒）

目の色両目青色

性別 男

年齢 15

身長 155 体重45
マジックブック

武器 本

好き ピカ、グラン、読書、昼寝、リンク
嫌い ピカのことが好きなやつら、辛いもの
休日の過ごし方 ピカの近くで読書と昼寝

キャラクター説明

ピカの弟。（昔からの弟ではない）

ピカのことをかなり慕つており、極度のブラコン。（ピカは普通のかわいい弟としてみている。）

冷静沈着だが、ピカのことになると無くなってしまう。
ピカみたいに異能は使えないが、かわりに魔術の威力のかなりの上昇と、魔術無詠唱ができる。

身体能力は回避に特化しており残りは平凡。

カノンノ達、ピカに好意を持っているやつが嫌い（理由はピカをとられたくないから、グラン以外）で、いつも喧嘩をしている。
神とマー・テルがピカに弟でもあげるかと簡単に決め造られた。（このことを知った時かなり怒っていた。）
ちなみにブラコン

闇影 絶
髪 黒

目の色 赤

性別	男		
年齢	18		
身長	168	体重	57
武器	鎌（混沌の鎌）	針	
好き	ピカ、剣咲	嫌い	無し
能力	アブノーマル		
		「人心支配」 「オートバイロット」	
		「反射神経」	
		「受信感度」	
		「知られざる英雄」 マイナス ミスター・アンノウン	
		過負荷	
		「大嘘憑き（オールフィクション）」 「エンカウント」	
		「不慮の事故」	
		「却本作り（ブックメーカー）」	
		休日の過ごし方 とくに無し	
キャラクター 説明			
普通の世界に住んでいた悲しい高校生。			
生まれた時に母が死んで、父が向かう途中で事故死したため家族の			
顔を見ていない。			
名前は大きくなつた時に自分でつけたらしい。			
孤児院で暮らしてたが、孤児院の子達に目が赤いと理由で差別され			
て虐められていた。			
小学、中学、高校でもそれは変わらずに同じ理由で虐められ続けた。			
ただ、高校時代には2人の友達がいたが1人は事故で死んだ、1人			
は転校でどこかに行つてしまつた。			
虐められたいたせいか体が怪我だけで、人を信じなくなつた。			
自分は悪口や殴ることもしなかつた。			
高校は寮がある学校でそこで暮らしていた。			
高校3年の7月の自分の誕生日に寮に大量のガソリンをばら撒き火			

をつけて、学校の生徒全員殺した。

裁判の途中で、持っていた銃で笑いながら自殺をしてこの世界を去つた。

目を覚ましたらチャライ神に出会って、別の世界に行くように言われた。

チャライ神に好きな願い事を5つを選んでくれと言われて
1つ目は「過負荷の「大嘘憑き」と「不慮の事故」と「却本作り」
を貰つた。」

2つ目は「釘を無限に何処からでも出せる能力を貰つた。」

3つ目は「能力の「人心支配」と「反射神経」と「知られざる英雄」と「受信感度」を貰つた。」

4つ目は「食料とお金が無限に出るかばんを貰つた。（自分しか開けない）」

5つ目は「自分の所持している能力と過負荷のON/OFFの切り替えと強化（自分の不都合の所をカット）」
の能力を選択した。

能力を授かった瞬間神の全ての能力を『大嘘憑き』で無くして釘で
殺して、復活させないまま目的の世界に行つた。

グラン・ハート

髪 赤

目の色 赤

性別 男

年齢 23

身長 198 体重 78

武器 ヴェリルズランス 槍

好き ピカ、ピチュー、龍牙（グランのドラゴンの名前）
嫌い ピカの障害になる者、ピカに好意のある者（ピチュー以外）

休日の過ごし方 鍛錬、ピカの警護

キャラクター説明

――――の住人。

ピカと3度も戦い、ピカの武に惚れて配下になった。

ピカを神みたいな見かたをしているので他の人によくひかれている。ピカの障害になる者は全て消そうとするがたまにピカに止められる。ピチューは仲の良い共と見てている。

ドラゴンに乗つて戦う、空中戦では敵無しの強さを誇る。ピカ達みたいにチートは無いがかなり強い。

剣咲 道哉

髪 黒

目の色 黒

性別 男

年齢 18

身長 170 体重 60

武器 銃剣（2丁）

好き ピカ、闇影、アドリビットムの皆、走ること

嫌い 普通と言われること

休日の過ごし方 武器の手入れ、ダッシュ、射撃練習、剣の技を学ぶ

キャラクター説明

ピカが人間世界の住人だったころの友達。

よくピカと闇影と遊んでいた。

走るのだけは得意だったが、他は平凡。

普通と言われると怒る。

学校で転校してからも普通に生きていたが、神にピカ達がいる世界に飛ばせてしまう。

武器は銃剣を使っているがチートを貰っていないので能力は平凡。

他にもオリキャラができるところに記入します。
グランの世界についてはまだ秘密です。

このオリキャラに、追加して欲しい能力があれば教えてください。

番外編（オリキャラ発表会）（後書き）

作者「以上、オリキャラ発表会でした。」

クラ「なかなか面白」そうな者だらけだな。」

ピカ「そういえば、思い出したことがあるんだ。」

エミ「何なの？」

ピカ「作者、俺の姿のことは？」

作者「あれは・・・・・意見無いから無かつたことにしたーー（逃）

ピカ「はあ！？待ちやがれええええーーーーー（追）」

エミ・クラ「「はあ・・・・・」」

クラ「・・・・・しめるか・・・・」

エミ「・・・・・しめますか・・・・今回はここまで、次回もよろしくね。」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
いい声で鳴いてくれるじゃねえか、作者—————

第10話（謎の男、闇影 絶）（前書き）

「サボつていいのか? (武器を構える)

作者「ちが……違いますーー（剣を喉に当たられている）」

「何が何だかわからん」

くなつたの。
レ

七八

作者「（ビクッ！）と、とつあえず本編をじりぞーー。」

第10話（謎の男、闇影 絶）

「あ～・・・体と頭が痛い・・・」

「我慢しろ。」

今、ピカはヴェイグとシング、ミントの3人とヘーゼル村の人に風邪薬を届けるためにもう一度、コンフェイト大森林に訪れていた。どうやらヘーゼル村はそろそろ風が流行る季節らしいので、クレアにこのクエストを出された。

ピカを除いた3人はこのクエストに参加していたが、ピカは前回の遅くなつた罰として連れて行かれた。

ちなみにピカの頭の痛みはアンジュとカノンノの説教、体の痛みは前回の術のせいである。

「やうだよピカ、元気出してガンドコ行けやうよ・・・」

「・・・そうだな、ガンドコ行くか！！」

「シングさん、ピカさん、ガンドコでは無くガングンじゃ・・・」

「ミント、こいつらには無駄だと思うから止めておけ。」

「ヴェイグさんかなり酷いこと言いますね・・・」

このまま4人は森の奥に進んでいった。

「ん?」

「どうしたピカ?」

「人の気配がする……」

「……何人だ?」

「1……2……さ、いや、4人だ。」

「……状況は?」

「……1つは走ってる……近くにもう1つ走ってるな、多分追いかけてるんだろう……もう2つは同じ所にいる、ゆっくりだが走っている奴らの所に向かっている。」

「……ピカ、ゆっくり歩いてる2つの気配の所を見てきてくれ。」

「わかった、ヴェイグは走ってる2つを頼んだぞ。」

「ああ。」

ピカは森の中に走つていった。

「あれ? ヴェイグ、ピカは?」

「そういえばいませんね。」

「……わからん。先に向かつたのかもしれないから、今は目的地に行こう。」

「わかったよ! !」

「わかりました。」

赤色が目立つ赤い服を着た少女、リタ・モルティオが歩いていた。

2人は体中に傷があり、ボロボロだった。

「エステル……………」

「落ち着けリタ、今は休んだ方がいいぞ。」

「つるさい！！そんなことよりエステルの方が先決なの！！」

「馬鹿やろう、さっきのウリズン帝国の兵達との戦闘で体がボロボロだらうが。そんなんでサレに勝てるわけ無いだらう。」

どうやらこの2人は先ほどまで戦っていたらしい。

「けど休んでる間にエステルが何かされたらどうすんのよ…！」

「それは大丈夫だ、サレの目当では星晶ホスチアだ、あいつには危害は加えないと。」

「けど…」「それなら俺の仲間が様子見に行つてるから大丈夫だ。
…けど…あんた誰？」

リタとユーリの会話に入り込んだのは、ピカだった。

「俺はピカチュウ・ライトニング。ギルド『アドリビトム』の1人だ。」

「そんなことよりエステルは無事なの？答えなさい…！」

「ん…・・・！…やばい、追い詰められてる…！」

「な…・・・い・急いで場所を教えなさい…！」

「…・・・位置は…・・この森のデカイ木の所だ。」

「わかったわ！！行くわよ、ユーリ…！」

リタは走り出そうとしていた。

「待て…怪我してるんだから休めって…！」

「そんなことしてるとエステルに危険が・・くつ・・・」

リタは足を押さえ始めた。

どうやら足を痛めるようだ。

「だから言つたろ・・・休んでる。」

ユーリが休むように言った。

「うるさい！！！私は絶対にエステルを助けに行く！！！」

しかしリタは立ち上がりもう一度歩き始めた。

「待て。」

ピカがいきなりリタに声をかけた。

「何よ」

「当たつ前よ。」

ピカはリタの目を見た。

ならピカのする行動は一つだ。

「…わかった。俺がかわりに行こう。」

「だが、お前とコーリは怪我してないじやない？」

「そんなこと……わかってるわよ……」

リタは顔を俯かせた。

それでもエステルを助けたいようだった。

「んじゃ、俺は行くぜ。」

「待てよ。サレはかなり強いぜ・・・勝てんのか？」

ユーリがそう聞いてきた。

その答えにピカはこう返した

「安心しろ。俺、強いから。」

そう言つたらピカは、天使の羽を出して飛んでいった。

「くつ・・・」

ヴェイグは一人、サレと戦つていた。

シングとミントにエステルを任せて、村での因縁を絶とつとしていた。

しかしサレは前回より隙をみせないので、ヴェイグは苦戦していた。

「流石はヴェイグ、僕に傷をつけただけはあるよ・・・けど、これで終わりだ。」

「まだだ・・・ここで死ぬわけにはいかない。」

「いいよ・・・最高だよ、ヴェイグ！！もつと僕を楽しませてくれ！」

やつしてサレが剣を構えようとしたが、いきなり後ろを向きたした。

「…………そこには誰だ！姿を出せ…………」

サレは森の中にやう言つた。

ヴェイグはピカがよつやく来たと思つたが……

「あちやー、氣配を消したと思つたのになー」

姿を現したのはピカではなく見知らぬ男だった。

「殺氣を出していたのに何を言ひ、お前……誰だ？」

サレは何故か震えていた。

ヴェイグはそれに疑問を抱いていた。

ヴェイグには殺氣が感じなかつた……いや、ヴェイグに殺氣を向けていなかつたのだ。

そして謎の男はこう答えた。

「僕？僕の名前は

闇影 絶

僕の友達の八神 やがみ 真耶君と剣咲 しんや 道哉君を知りませんか？

第10話（謎の男、闇影 絶）（後書き）

作者「オリキヤラ一人目登場！！」

ピカ「闇影 絶だな。けど、あいつの最後の八神 真耶つてだれだ？」

作者「よく考えれば誰だかわかるよ。それよりも新しい前書き・後書きメンバーの紹介だよ！！」

クラ「誰が来るんだ？」

作者「それは・・・エミル君どうぞ！！（カンペを渡す）」

エミ「えっ！？あっ！？・・・新しいメンバーは、コーリ・ローワ

エルです！！」

ユー「やつと出したか、くそ作者・・・」

作者「はい、酷い暴言ありがとうございました。今回まではここまです、次回もよろしくね。」

ユー「は！？他に話す」とないのかよ？」

作者「無いよ。」

ユー「死ね！！（剣を振る）」

作者「だが断る！！（避け）んじゃ、またね～～（逃走）」

ユー「待てクラー！（追う）」

第1-1話（VS闇影・前編）（前書き）

作者「ようやく回線直った-----！」

ピカ「かなり長かったな・・・・」

エミ「本当に久しぶりだよ・・・何日経ってるの？」

クラ「前回の投稿したのは8月10日・・・・29日ぶりか・・・

ユー「あと少しで一ヶ月じゃねえか！！」

作者「これはまずい・・・早めに本編始めよ！」

エミ「そうだね。では、本編スタート！！」

第1-1話（▽△闇影・前編）

「僕？僕の名前は

闇影 絶

僕の友達のハ神 真耶君と剣咲 道哉君を知りませんか？」

謎の男、闇影 絶はそう言つた。

ヴェイグは、絶の姿を見て思つたことは、
背はピカより少し小さいくらい、服は体にピッタリの黒いコート、
髪はコートの同じの黒。

1番気になつた目は、血のよつた赤の目。

その目は暗く、ほとんど生気が無い目。

だが、その目に1番似合つ言い方は『殺人者』の目・・・
ヴェイグがそう思つてゐると、絶が

「もう1度言います。

僕の友達のハ神 真耶君と剣咲 道哉君を知りませんか？

知つていないのでなら殺します、知つてゐのなら言わせてから殺します。」

と言つてきた。

「残念だけど知らないね。けど、僕は君に殺されるつもつは無い。
逆に殺してあげよつ！？」

サレはそう言つと、剣を抜き、絶に特攻した。

「突きか・・・あまいね。」

絶は何処からか鎌を取り出した。
そして鎌をサレに向かつて投げた。

「あたらないね、死ね。」

サレは突きを放つた。

突きはそのまま、絶の心臓に刺さつた。
絶は血を流しながら倒れた。

「あの気迫でこの程度なのか・・・・・拍子抜けだね・・・・」

サレは、もう一度「エイグ」と戦おうと「エイグ」のまゝを向いた。

「・・・・・サレ後ろだ・・・・」

「何を急に・・・・・」

サレが後ろを向くと、先ほどサレに心臓を刺された絶が立つていた。
しかも、血や怪我の後も無い状態で。

「残念だけど、この程度では僕は死ないよ。」

「ば・馬鹿な・・・心臓に刺さつていたはずなのに・・・・」

「ふふふ・・・僕は不死身なの。後、ついでに言つけど

君、死んだよ。」

「は?」

その瞬間、サレの胸に絶が投げた鎌が刺さつた。

「サレ——————！」

「嘘……だろ……」

「残念だけど本当だよ。まずは一人目だね。」

絶は笑っていた。

そしてそのままはヴェイグに向かつた。

「次は君だよ。けど、君は僕の質問に答えてなかつたな、早く言つてよ。」

「…………」

「ね～、まだ～？」

「…………許さん…………」

「え？ 聞こえないよ～～～！」

「貴様だけは許さん！！！」

ヴェイグは背中の大剣を抜き、絶に向かつた。

「大振りの連続か……」これは避けるのは無理かな、ならば

『跪け（ひざまづけ）』

絶がそう言つと、ヴェイグはいきなり武器を置き、跪いた。

「なー？」

「話す気もなさうだし……殺すか……」

絶は鎌を上にまで持ち上げ

「死ね」

笑みを浮かべながら振り下ろした。

（クレア、アドバイジームの監・・・俺は11Jまでのやつだ・・・）

ヴェイグは死を感じ、そう考えていた。

だが

「『鮫衝撃』」

天はまだ、ヴエイグを見放してなかつた。

「！？」

「ヴエイグ！！大丈夫か？」
「・・・ああ、ありがとう・・・ピカ。」

ヴェイグの前には、剣で鎌の一撃を抑えたピカがいた。

「君は・・・・・誰?」

「俺か？俺はピカチュウ・ライトニング、仲間を傷つけるなら俺が許さねえ！！」

第1-1話（VS闇影・前編）（後書き）

作者「前半終了！！」

エミ・クラ・ユー「…………」

作者「どうしたの？」

エミ「サレ…………大丈夫なの？」

作者「…………」

ユー「何か言えや『ラ。』」

作者「…………後半に続く！！（逃走）」

ユー「逃がすか！！！！！」

クラ「はあ…………」

エミ「ん？紙が落ちてる…………『連投します。次はパラレル物語です。楽しんでつてね！！』だつて。」

クラ「そうか…………とりあえず、ここは閉めるぞ。」

エミ「うん。この後すぐ連投しますね、そちらもよろしくね～」

番外編（パラレル物語・スカイブルー編）（前書き）

作者「はあはあ・・・何とか逃げ切った・・・今回の番外編はパラレルワールドをもし、ピカがしたらつて話だよ。では、本編スタート！」

ピカチュウ・ライトニング。

彼は現在は、ルミナシアで、その世界の住人のカノンノやクラトス達、別の世界の人吉善吉や真田雪村達と暮らしている。

だが、君は『パラレルワールド』というのは知っているだろ？
世界がどんどん枝分かれしていくって、いろんなパターンの未来が
存在するという考え方である。

「むむむむむ・・・・・」

卷之二

卷之三

例えば今田、君は朝食を食べましたか？

食べたのなら、もしかしたら「ハーレル」「ハルトの君は、朝ごはんを食べてないのかもしれない。

君は今田宿題をしましたか

していながらもしかしたら「リカルトの君は宿題をしているのかもしれない。

「ただしおぬしは絶対に世界救つてもううからな！！」

「わかつたわかつた・・・あつ、どうせならその世界の全ての技

— 転送 ! ! —

このように、もしもの数だけいろいろなパラレルワールドがあるかもしれません。
・・・

「ふう……昔よりかなり性格が違ったの……ひやんと寝しておかの……。」

これから始まる物語は、もしも世界の一つを、ピカチュウ・ライティングが転生する物語である。

「ん？……あれ？……ピカはめじ！」と叫ったんじや？

血まみれで倒れた男が1人いた。

「！」

ピカは目を覚ました。

目を覚ますと、周りは何処かの道路のようだった。
近くにあるのは横に倒れたトラックと

「ん？・・・何処だここ？」

ピカはそれに気づくと大急ぎで駆け寄り、体を揺すつてみた。

「おい！！大丈夫か、しつかりしろ！！」

男は反応が無く、じょじょに体温が小さくなつていくのもわかつた。

「どうあれば……！？」

ピカの頭の中に1つの言葉が浮かんだ。

ピカはこの言葉の意味がわからなかつた。
だが

「・・・・・黙けてみる」ともありか・・・」

ピカは男にお腹に手をあてた。
その瞬間に、ピカのいる地面から術式が出現した。
そして

「『ファーストエイド』」

唱えた。

男の体の傷が少しづつだが、癒えていく。

ピカはそれだけを見ると、少しづつ視界が暗くなつていつた。

(な・ん・だ・し・か・い・い・が)

そして完全に視界が無くなつた。

その光景を倒れている男の心の中から見てゐる者がいた。

（ふむ・・・おかしな力を使う人間がいるのだな・・・）

「ふ

何か声が聞こえた。
思うことが大きい。

「ぞ」

また聞こえた。

先ほどの声にひけをとらない。

「けんつ」

・・・大きい。

けど、最後のは・・・溜めてるな。

「なあああああーーーーーーーーーーーー

とりあえず口を開けた。

そこには看護師さんとおじいちゃん、あの、血まみれで倒れていた男がいた。

・・・なぜか時間が止まっていたが・・・・・

「あ？」

少し時間が経つと、男が服を着て、出て行こうとしていた。
看護師さんが必死で止めている。

（しかたない・・・）

ピカは男の前に立ち、進行の邪魔をした。

「何だてめえ・・・」

「俺はピカチュウ・ライトニング。兄ちゃんは？」

「・・・・・風見天晴・・・・」

これが、『黄色の剣王』ピカチュウ・ライトニングと『リアル格ゲー
ーキャラ』風見天晴の出会い。

後にピカは、天晴の過去を知り、天晴の心の中にいるスカイブルー
と会い、天晴を守る剣となる。

後に天晴は、ピカの記憶を知り、ピカの強さと弱さを知り、ピカの
心を支える人となる。

そして、遠くない未来に始まる『色彩戦争』に彼らは挑む・・・

番外編（パラレル物語・スカイブルー編）（後書き）

作者「番外編終了！！ちなみにスカイブルーは、ガンガンで見れるから、わからない人は見てみてね。

連投はここまで、後、パラレル編は、ネタが無い時ちょくちょく書くことにします。こちらもよろしくね！！ではまた次回！！」

第1-2話（バシ電影・中編）（前書き）

作者「そういえば、剣先の武器と性格と投稿日を変更したよ。」「エミ、何で急に？」

作者「だって『剣先』なのに銃を使うのが変だもん・・・」「ユー、なら最初から剣にしとけよ！――」

作者「ゴメン！――とりあえず、武器は銃剣になるからよろしくね！――」

ユー「で、性格は何でなんだ？」

作者「性格は書くの難しい！！以上。」

ユー「・・・ボコボコにするぞテメ。」

作者「きやーこわーい（笑+逃）」

ユー「・・・殺す！！（怒+追）」

エミ「あつ・・・投稿日言つてないのに行つちやつた・・・と、とりあえず本編スタート――」

第1-2話（▽△闇影・中編）

「一つ聞きたいことがある……」

いきなり闇影が口を開いた。

「何だ？」

「さつきの技……『鮫衝撃』をなぜ使える?」

闇影が気になっていたこと、わきほびピカが使った『鮫衝撃』のことを
とだつた。

「俺にもわからない……体が勝手に動いて使つただけだ……」

「そりか……なら聞くことは無い!!」

絶は鎌を持ち、特攻してきた。

「いくぜ!!」

ピカは体の力を全て抜き、体を落とさせた。

「その技は……まさか……」

顔が地面に当たる瞬間に、足の筋力を全開にした。

「へりえ……大亀流雷電型 第一式『紫電閃』……」

ピカは剣を振った。

「・・・まじかよ。」

「くつ・・・ギリギリ避けきつた！！」

だが、絶には当たらなかつた。

「だがくそ、^{アブノーマル}能力を使わなくては死んでいた・・・
能力・・・？」

「君に言う必要は無い！！くらえ！！」

絶は服の袖の所から釘は取り出し投げた。

「！あぶなあ！！」

ピカは剣を振り、釘を弾いた。

「まだまだいくよ・・・『^{ネイルライン}釘雨』」

ピカの頭上に沢山の釘が現れた。

「なつ！？」

「終わりだよ・・・」

絶がそう言つと釘は地面に落ちていつた。

そこには4人の男がいた。

3人は見覚えのある人達だつた。

クラトス・アウリオン 人吉善吉 真田雪村だつた。

しかし、もう1人は見覚えが無かつた。

だが、姿はある男に似ていた。

黄色い髪に、先の方は黒、目の色が青だつた。

「ここに兄さんが・・・・そうですね、クラトスさん?」

「ああ・・・あれば持つてきているのか?」

「当然ですよ。何たつて僕は兄さんの弟

ピチュー・ライトニング

ですから。」

「まさかピ力に弟がいたとわ・・・」

「ああ、俺やめだかちゃんも知らなかつたぜ・・・」

「何をぼやいているんですか、早く兄さんの所に行きますよ。・・・
ああ、兄さん待つていてください・・・今、僕が兄さんの大切なも
のをお届けに行きます・・・・」

ピチューはそう言つと、森に歩いていった。
このピチューを見ていた2人は

((まさかの「ラ」・・・・))

と考えていた。

「はあ・・・」

クラトスはため息を吐くと、2人の襟を掴んで森に入つていった。

第1-2話（VS闇影・中編）（後書き）

H「中編終了だよ。」

作者「ああ・・・疲れた。」

ユ「お前のせいでな・・・」

H「お帰り。てか作者。」

作者「ん？」

H「投稿日のことば？」

作者「ああ、忘れてた。投稿日は1週間は無理だから3週間以内に
変更になりました。皆さん、そこの所をよろしくお願ひします。」

ユ「・・・今日は疲れたし寝る・・・」

作者「俺も・・・」

H「え!? ちょ! ?」

作者・ユ「おやすみ・・・」

H「ええー・・・じ、次回もよろしくお願ひします。」

番外編（オリキャラ発表会2）（前書き）

緊急ですが、この小説の必要の無い所を削除します。
対象は本編と番外編とキャラクター説明以外です。

アンケートなのですが、これから書くパラレル編のお話は『全て1話完結』か『ある程度まで書く』か『書ける限界まで書く』のどちらがいいですか？

票が多いほうを選択したいと思います。票が無ければ『全て1話完結』になります。

期間は今から1ヶ月にします。

よかつたらよろしくお願ひします。

番外編（オリキャラ発表会2）

ライチュウ・ライトニング

髪 金髪 髪の毛先は黒 目 両目青色

性別 女性

年 19

身長 170 体重 女性なので測定しない

武器 大剣 （ライオウケン）

好き ピカ、ピチュー、アドリビトムの皆、肉類、戦闘、運動

嫌い 動かないこと、野菜、読書、勉強

休日の過ごし方 特訓

キャラクター説明

ピカとピチューの姉さん。

極度のプラコン。

かなりのバカ。

身体能力はバルバトス並、頭がロイド以下。（体は細め。）
アドリビトムの皆を妹や弟に見ている。（自分より年上以外。）
神とマー・テルがピカに姉でもあげるかと簡単に決め造られた。（このことを知った時喜んでいた。）

イーブイ・ナナロア

髪 茶髪 目 黒

性別 女性

年 12

身長 151 体重 女性なので測定しない

武器 腕輪 セブンチエイニング

好き 甘いもの、フルーツ、動くこと

嫌い 動かないこと、勉強、苦いもの、おばけ

キャラクター説明

ピカがポケモンの世界にいたときの妹みたいな存在。
武器の腕輪は7つの力を持っている。

持っている力は『火』『水』『雷』『闇』『魔』『草』『氷』

おばけをみると泣く。

チートは持つてない。

静凪 奈美

せいなぎ なみ

髪 青 目 青

年 16

身長 162 体重 女性なので測定しない

武器 杖 神々のロッド

好き ピカ、ぬいぐるみ、野菜、フルーツ、読書

嫌い 肉、魚、怖いもの

キャラクター説明

ピカや絶と同じ世界の人間。

ピカが事故から救つてもらつた人。

おとなしい性格でかなり落ち込みやすい性格。

ピカのことが好きだが、自分のせいでもピカが死んでしまつたので積極的になれない。

チートは『どんな怪我をも治す力』をもらつていて。
怖いものが嫌い。

セミナ

髪 白 目 赤

性別 女性

年 ???

身長 179 体重 女性なので測定しない

武器 色々 (剣や槍など何でもできる)

好き 戦闘、辛いもの、武器

嫌い 甘いもの、動かないこと

キャラクター説明

戦闘マニアでピカの師匠。

神の友達。

武器はすべて使用できる。

いつも笑いながら魔物たちと戦っている。

戦闘能力がチートなみ。

1人で3国を余裕で潰せる。

作者「キャラは考えたけど説明はあまり思い浮かばなかつた……」

ピカ「男たちよりあまり書いてないな……」

クラ「その前にセミナがおかしいだらう……」

作者「ピカの師匠なら」れくらに必要かなと（笑）」

クラ「だからと書つてやつすぎだらう……」

作者「それは置いといて、ピカの姉さんが出来ました。」

クラ「置いとくな……」

ピカ「俺には他に兄弟はいるのか？」

作者「これ以上はいないかな。てかこれ以上オリキャラも書くのを
ないし。」

ピカ「ふーん。」

作者「あ、イーブイはカツタさんの提案でできたので、カツタさん
ありがとうございました。」

クラ「そろそろ時間だ、終了にするぞ。」

作者「了解！…」」まで読んでくれてありがとうございました。」

ピカ「次回もよろしくなー！」

ネタが無いので、考え中恋姫のHペローグを投稿（前書き）

作者「ネタが思い浮かばない・・・辛い・・・」

ピカ「作者、そんなところで寝てるとH///と間違われるだ。」

作者「どうせ俺はネタが思い浮かばないH///せ・・・」

H///「完全に鬱だね（汗）」

ピカ「放置しどとか、今回は作者がネタが考えきれないで急遽、
考え中の恋姫工

ピローグを投稿します。」

H///「設定は・・・現在のルミナシアのかなり時が経っている状態。」

「

ピカ「姿は、今よりかなり強い、身長が伸びて、スーツを着ている
以外は変更は無
いかな・・・」

H///「それじゃ、恋姫Hピローグスタートーー！」

ネタが無いので、考え中恋姫のHペローラグを投稿

ルミナシア

この世界に『ライセンダー』が降り立ち、とても長い時が経つた……

今、この世界に生きる生物は1人を残して誰もいない。
世界樹が枯れて、生物が生きていけなくなつたのだ。

生き残つてゐる人間、その者の名はピカチュウ・ライトニング。

彼は、ディセンダーなのでここまで生き残れた。

彼は世界樹のおかげで生きている……

だが、世界樹が完全に枯れれば、彼も死んでしまうのだ。

残された時間でピカは、昔は栄えていた博物館にいた。
そこの中の部屋に文献を読んでいた。

「ここにも世界樹を蘇らせる方法は無いか……」

ピカは、どうやら世界樹を蘇らせる方法を探してゐるようだ。

「ここに賭けていたんだがな……時間からして、次の博物館に
無ければ終わりだな……」

ピカはそう言つと、文献を元の位置に戻し、部屋を後にした。
そして、博物館を出ようとした時だった。

パリ――――――

博物館の中でガラスを割る音が聞こえた。

「……時間が余り無いが、見に行つてみるか・・・」

ピカは音が聞こえたほうに歩き出した。

ピカは、音がした所に到着した。

そこには、白服の少年が、博物館の展示してあつた鏡を持っていた。

「君は何をしてるんだ？ その鏡は博物館のだから持つて行くのは駄目だぜ。」

「つむせえ、邪魔をするなり・・・殺すぞ？」

白服の少年は殺氣を出した。

だが

「ふうん・・・この程度で殺すか・・・

笑わせんな。」

ピカはこれでもいろいろな世界に転生ってきて、たくさんの強者と戦ってきた実力者だ、この程度の殺氣は意味が無い。

そしてピカも、殺氣を出した。

「なつ！？」

白服の少年は、体が震えだした。
どつやうらピカの殺氣に驚き、恐怖しているようだ。

「今なら鏡を元の位置に戻せば許してやる……どつする？」
「……ほひけ！！」

白服の少年は蹴りを繰り出してきた。
ピカはそれを、体を軽く後ろに下げてかわした。
そして手に力を込めた。

「交渉決裂だな。……ふつ！」

ピカはそう言つと、白服の少年の腹にパンチを繰り出した。

白服の少年は、壁まで飛んでいった。
しかし、これがいけなかつた。

パキ

どつやうら白服の少年は鏡を落としてしまい、割れてしまつた。

「あつ！？・・・やべえ・・・」
「・・やつてしまつたな・・・」

この瞬間、鏡はこきなり強烈な光を発した。
光が消えた時には、そこにはピカの愛刀の2本しかなかつた・・・

1つの物語が終わり、新たな物語が始まる。

ネタが無いので、考
え中恋姫のH
ピローグを投稿（後書き）

ピカ「未来の俺強すぎるとだらう・・・」

クラ「しかも皆死んでる・・・」

ユー「博物館の物割つてるし・・・」

作者「・・・・鬱だ・・・・」

ピカ「・・・・とらあえず、恋姫Hピローグはこんな感じらしい。」

「

クラ「ちなみにじぱらぐの間投稿も出来なくなる可能性がある。」

ユー「何でだ？」

クラ「作者が部活の大会、修学旅行、テストが連續であるらしい・・・」

「

ユー「・・・作者死んだな・・・」

ピカ「皆、更新遅くてゴメンな、更新はまた遅くなるかもしけない
けど次回もよろしくな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646s/>

世界を救う者～ルミナシア編～

2011年11月11日14時13分発行